

少年少女ミケ

亜蘭澄椎

# 目次

## 処女の銀輪（体験版につき途中まで）

男を女に変えてしまう魔法の指輪……処女の銀輪を手に入れた少年……夏焼魅恵の恋物語を綴った、長編小説です。

## 災難の前奏曲（体験版未収録）

本編では、詳しく触れられる事が無かった、魅恵が処女を失った当日、バイト帰りに痴漢に襲われた時のお話を綴った、処女の銀輪の番外編です。

## メモリーカードの行方（体験版未収録）

本編終盤で魅恵は、輪姦された映像が記録されたメモリーカードを、落としてしまいました。そのメモリーカードが、その後どうなったかという話を綴った、処女の銀輪の番外編です。

## 夢落ち？（体験版未収録）

水泳の授業中、クラスメートの悪戯で発情してしまった魅恵は、プールから出た後、空夜に強引に迫られてしまい……という話を綴った、処女の銀輪の番外編です。

## 兄さんは、私の物（体験版未収録）

夏休み、沖縄から破魔崎に戻って来た、妹の伊月と魅恵の話を書いた、処女の銀輪の番外編です。

処女の銀輪

「家族を抱えたサラリーマンが、リストラされる不景気に、男子高  
校生のバイト求人が、沢山あるとは思って無かったけどさ……本当  
に無いね」

ネットのアルバイト情報サイトをチェックしながら、夏焼なつやき魅恵みけいは  
呟いた。魅恵がいるのは自分の家では無く、親友の葛城慎吾かつらぎ しんごの部屋  
である。

自分の家のパソコンの調子が悪いので、魅恵は慎吾の部屋でパソ  
コンを借り、バイトを探しているのだ。高校一年の三学期の終業式  
が終わった直後に、慎吾の部屋に来て以降、魅恵はずっとバイト探  
しを続けているので、すでに四時間は探し続けている事になる。

「ミケは探し始めるの、遅すぎるんだよ。俺なんか、今月の始めか  
ら探し始めて、決まったのが一昨日なんだぜ」

姉の葛城晶あきと、対戦格闘ゲームに興じながら、慎吾は言った。

ミケというのは、「みけい」と読む魅恵の名前から付いたあだ名だ。  
活発で身軽、見た目も可愛い男の子である魅恵のイメージには、  
猫に通じるものがあり、ミケというあだ名が、子供の頃から定着し  
ている。もつとも、日に焼けているかの様な色黒の肌の持ち主であ  
る為、ミケという仇名から連想される三毛猫というより、魅恵の印  
象は黒猫っぽいのだが。

「そんな事言っちゃって、いきなり金が必要になったんだから、仕方  
が無いだろ。本当は春休み、バイトするつもりじゃ無かったんだか  
らさ……」

高一から高二に進級する春休み、魅恵は趣味で参加しているフッ  
トサルチームとバスケットチームの試合に、可能な限り参加し、ス  
ポーツ三昧の春休みを、満喫するつもりだった。ところが、終業式  
が終わって葛城家を訪れた直後、その予定が変わってしまったのだ。  
「あたし、余計な事しちゃったかな？」

ゲームを中断して立ち上がった女性が、ショートヘアの頭を掻き  
ながら、気まずそうに呟く。宝塚の男役が務められそうな外見の、  
この長身の女性が、慎吾の姉の晶である。

魅恵とは対照的な、色白の肌を持つ晶は、弟の慎吾同様……百八  
十センチ近い長身の持ち主なのだ。身長が百六十五センチしかない  
魅恵より、晶は十五センチ近く背が高い。

椅子に座っている魅恵の後ろに来た晶が、パソコンのモニターを覗き込むと、丁度、胸が魅恵の頭に乗る感じになる。頭の間近にある魅惑的な胸の存在を意識して、魅恵は少し照れてしまう。

背が高い上に、かなり整った顔立ちの葛城姉弟は、勉強が出来る優等生の上、スポーツ万能であり、性格まで良い。当然、二人とも昔から、異性にも同性にも人気がある。

それなのに、今だに二人とも、異性との交際経験が無い。親が二十歳前の男女交際を、厳しく禁じているせいだと、魅恵は二人からは聞いている。

「そんな事無いです。凄く嬉しいんですから、俺！」

魅恵の返事を聞いて、晶は安堵の表情を浮かべる。

「それなら、いいんだけど……」

晶は魅恵や慎吾より、四つ年上の女子大生である。バイクが趣味の晶は、今度新しい四百ccのバイクを買うので、今まで乗っていた二百五十ccのバイクが不要となり、魅恵が貰う事になったのだ。古いバイクなので、中古で売っても、大した値段にはならない。それなら、以前からバイクを欲しがっていた魅恵に、あげようという話になったのである。

有り難い事に、バイクはただで手に入ったのだが、肝心な免許を、魅恵は持っていないかった。そこで、中型免許を取る事にしたのだが、先立つもの……金が無い。

金が無いなら、稼ぐしか無いという訳で、魅恵の春休みはフットサルでもバスケットでもなく、アルバイトに費やされる事になったのである。ところが、不景気の上、出遅れたせいか、中々バイトが見つからず、困っていたのだ。

「女の子の接客業だったら、結構あるんだけどなあ。ウエイトレスとか、ファーストフードのカウンターとか……」

「女装して申し込んでみれば？ ミケちゃん可愛いから、誤魔化せるかもよ」

晶は気楽な口調で、軽口を続ける。

「そういえば、友達がバイトしてる店が、ちようどウエイトレス募集してるって言ってたな。紹介してあげようか？」

「バレるよ、いくら何でも」

確かに、魅恵は外見だけなら、ボーイッシュな少女と言っても通用する……というレベルを超えて、少女にしか見えないタイプであ

る。だが、ウェイトレスのバイトと言えば、制服に着替えたりしなければならぬので、幾ら女装しても、誤魔化し切るのは無理だろうと、魅恵は思う。

「そうかなあ？」

「そうだよ！」

魅恵は不愉快さを嘔み殺しながら、力強く否定した。実は魅恵は、女の子っぽい自分の外見が、余り好きでは無い。

スポーツは万能で喧嘩も強く、勉強もトップクラスなのだが、魅恵も葛城姉弟同様、異性との交際経験が無い。葛城家の二人と違って、親に男女交際を禁じられている訳では無いのだが、見た目が男に見えないのが災いして、女性から男性扱いされてこなかった事が、その大きな原因の一つだったのだ。

一部の女子プロレスラーの様に、男勝りを通り越して、男性的と言える程の外見の女性は、男から見ると恋愛の対象には、成り辛い。それと同じで、殆どの女性より、外見上の女性的な美しさに恵まれてしまった魅恵は、女性からすれば、複雑な感情を抱かざるを得ない、微妙な存在なのである。

おまけに、余り女と縁が無いのに、美少女然とした外見のせいで、男から痴漢されたり、口説かれたりする事は、何度も有るのだから、魅恵が自分の外見を好きでは無くなるのも、無理は無い。

そして、魅恵の身近にいる憧れの人も、自分を恋愛対象として、見てはくれないらしいと、魅恵は認識している。

(こんな外見で無ければ、男として……恋愛対象として、見てくれるかもしれないのにな)

女装してバイトする事を勧めてくる晶を見て、魅恵は苦笑しながら、溜息をつく。

結局、バイトに関しては何も決まらなまま、魅恵は慎吾の部屋を、晶と共に後にした。陽が沈んだ直後なので、西の空だけが、まだ少しだけ明るい。薄暗い住宅地の道を、魅恵と晶は、並んで歩いて行く。

慎吾は親がオーナーであるアパートの一部屋を、自分の部屋として使い、一人暮らしに近い生活を送っているのだが、晶は親と同居している。慎吾のアパートと魅恵の家の間に、葛城家があるので、慎吾の部屋で晶と一緒にになった場合などは、魅恵は途中まで、晶と

一緒に帰る事が多い。

「元氣出しなよ。中免試験用の参考書とか、あたしが使ってたの、あげるから」

「ありがと……」

「商店街の店の店頭なんかでも、バイト募集のチラシとか貼ってあるから、チェックしてみたら？」

「そうしてみる。その手のチラシの方がネットや求人情報誌より、当てになるかもな」

「ま、いざとなったらミケちゃんには、女装してウエイトレスって手もあるけどさ」

「それは無いって」

「そうかなー、イケると思うんだけど……勿体無いな。ミケちゃん、女の子より可愛いのにね」

晶は、残念そうに呟く。大きな掌で魅恵の頬を、優しく撫でながら。

頬を撫でられた魅恵は、頬を染める。照れ隠しの為に、何か別の話題に切り替えようと、魅恵は頭を巡らす。話題を切り替える前に、葛城家の前に辿り着いてしまった。

「免許とったら、二人でツーリング行こうね！ お休み！」

目的地である自宅に着いたので、晶は魅恵に手を振りながら、玄関に向かう。ドアの開閉音を、夜になろうとしている辺りに、響かせながら、晶は家の中に姿を消す。

晶を見送った後、ほんの十メートル程先にある自分の家に向かって、魅恵は歩き出した。

あきらねえ  
(晶姉と二人でツーリングかあ……)

魅恵は、晶とツーリングに出かける自分の姿を想像して、顔を弛ませる。実は、晶は魅恵の初恋の相手であり、今現在でも憧れの存在でもある。

普段から魅恵と晶は、良く一緒に遊んでいる仲なのだが、姉貴分と弟分という関係が、長く続いていた。晶が異性との交際を禁じられていた為、それ以上の関係が成立し難い状態だった事が、そんな関係が長続きた原因だと、魅恵は思っている。

最近、晶は二十歳の誕生日を迎えたので、すでに親も、異性との交際を禁じてはいない。晶との関係を、恋人関係にまで発展させた

い魅恵にとつては、晶が二十歳を過ぎると同時に、晶からバイクを貰える事が、運命的な出来事のように思えたのだ。

（こりゃあ、気合い入れて、バイト探さないとな。ちよつと、商店街の方見てくるか……）

魅恵は、自宅の前を通り過ぎ、破魔崎<sup>はまひら</sup>商店街の方に向かって、歩き出した。

「あれ？ 珍しいな、開いてるよ」

破魔崎商店街に辿り着いた魅恵は、普段は殆ど閉まっている店が、珍しく開いているのに気が付いた。珍しくも開いていたのは、妖<sup>あやし</sup>シ屋という、かなり妖しい名前の古物商である。

明治や大正時代の建築物を思わせる、古臭いデザインの妖シ屋は、魅恵達の地元の破魔崎市では、割と有名な店である。月に一日か二日しか開いていないと言われる程、営業している事が珍しい上、かなり妙な物を売っているという評判なので、魅恵も、一度は店の中を、見てみたいと思っていたのだ。

興味を惹かれて、妖シ屋の店頭を覗いてみた魅恵は、店頭に貼られていた求人チラシの存在に気付く。「店番募集、詳細は面接にて」という、大雑把なチラシである。

（ラッキー！ 丁度いいや、店の中を覗きついでに、一応話を聞いてみるか）

魅恵は気楽に、妖シ屋に入る事を決めた。ドアに手を伸ばし、開けようとする、ドアは勝手に開いた。とても自動ドアには見ええない、木製の引き戸である。

「——自動なんだ……ボロい木戸なのに」  
「いらつしやい」

低いトーンの女性の声が、魅恵を出迎えた。声のする方……薄暗い店の奥には、時代物のレジスターを前にして座っている、三十代後半くらいに見える女性がいる。

店の女主人なのだろう。魅恵の好みでは無いが、ウエーブのかかった長い黒髪が印象的な、かなり男好きのする感じの、艶っぽい大人の女性である。

占星術系の女占い師の衣装を、少し地味にした感じの服に、豊か

ではあるが、肥満とは縁遠い身体を包んでいる女主人は、怪し気な雰囲気と、良く似合っている人だなど、魅恵は感じた。

「あの……表のチラシ見たんですけれど。店番募集っていう……」

「ああ、バイト希望の方。君は……男の子よね？」

「そうですね」

「ウチの店の店番は、基本的には女じゃないと、勤まらないんですけど……」

「そうですねですか、それは残念」

「あ……けど、君くらいに可愛かったら、男でもいいかな。身体が男でも、女になって貰えばいいんだから」

「はあ……女装するんですか？」

（今日は、良く女装しろと言われる日だな……）

魅恵は少し、うんざりした気分になる。

「女装じゃなくって、女になるのよ」

（女になる？ どういう事だ？）

いきなり、変な事を言い出す女だなど、魅恵は思う。

「今……私の事、変な女って思ったでしょう？」

「あ、いや、そんな」

凶星だったので、魅恵は狼狽える。女主人は、そんな魅恵を見て、楽しそうに笑った。

「いいな……君、気に入ったよ」

微笑みながら、女主人は魅恵に語りかけ続ける。

「君、うちで働かない？ 週に二日位のペースで、長期で働ける人を探してるんだけど……」

「あ、長期しか募集してないんですか？」

女主人は、頷いた。

「長期しか募集してないんですでしたら、他を探します。春休みの短期バイト、探してるんで」

「そう……残念ね。春休みが終わって、長期のバイトとか探す事になったら、ウチの店に来てね、歓迎するから」

「そうします」

無論、社交辞令である。家の近所の店で、女装して長期間働くつもりは、流石に魅恵には無かったのだ。

「——女装してバイトっていうのは、やっぱりキツイもんがあるよな、

流石に……」

独り言のつもりだった魅恵の呟きは、女主人の耳に届いてしまう。「だから、女装じゃなくなつて、女になつて貰うつて言つただけよ」「店番のバイトする為に、性転換手術する人なんていませんよ」「手術なんて、必要無いの。そこにある指輪をはめるだけでいいのよ」

女主人は、魅恵の右隣の棚を指差した。棚には、古びたアクセサリが並んでいる。様々な不思議な紋様が刻まれた、指輪やブレスレット、ネックレスなどが並んでいるが、掃除が行き届いているのか、ほこりは殆ど被っていない。

「乙女座の印が刻んである、銀の指輪があるでしょう？」  
(これかな?)

魅恵は、指輪の一つを手にとった。シンプルなシルバーのリングの表面に、乙女座の紋様が刻んであるリングである。

「『処女の銀輪』っていう指輪なの。その指輪をはめた男の人は、午前零時を過ぎると、その後二十四時間……身体が女になるのよ」

女主人は、銀色の指輪……処女の銀輪を眺めながら、続ける。

「指輪をはめたままにすれば、何日でも何年でも、女のままですられる、魔法の指輪って訳」

「まさか！」  
「嘘だと思ふんなら、試してみる？ 君なら、可愛い女の子になると思うな」

「そんな馬鹿な事、ある訳無いじゃないですか」

魅恵は、女主人の言う事を、一笑に伏しながら、指輪を右手の薬指にはめてみる。サイズは魅恵の指に、ぴったりだった。

「この指輪のデザイン、好きだな。売り物なんですよね、これ？」

「そうだけ……」

「幾らなんです？」

「そうねえ……君なら、百円でいいわ」

「百円？ だったら、買います！ 俺、指輪集めてるんですよ！」  
ポケットから百円玉を取り出して、魅恵は女主人に手渡した。

「売るのは構わないんだけど、四つ程……注意しておく事があるの」「注意？」

「一つ目は、女になつたら、二十四時間は絶対、男に戻れないとい

う事。二つ目は、次の日……男に戻りたいっていう時には、午前零時が来る前に、指輪を外さないとダメだって事」

魅恵は頷きながら、女主人の注意に耳を傾け続ける。

「三つ目は……女になってる時は、警察沙汰になるような真似をしない事。警察が動いて、うちの店が調べられるようになったら、困るから」

「女になる指輪なんて、警察がまともに取り合ってくれるとは思えないけどな」

「そうかもね」

女主人は意味深な笑みを浮かべながら、魅恵に同意する。

「それで……最後の、一番気をつけなくてはいけない四つ目の注意は、女になってる時に、男相手にセックスしたら、男でも女でも無くなってしまおうって事ね。女相手なら大丈夫だけど」

「男でも女でも無くなる？」

「——男女両性体とか両性具有者とか、日本の古い言葉だと、ふたなりとか言われてた、男と女の中間の性別になっちゃうのよ」

男女両性体などの存在は、オタク系の娯楽作品などに、たまに出て来るので、魅恵も知っていた。

「まあ、『処女の銀輪』っていうくらいだから、処女で無くなるよ  
うな真似をした人間には、そういう罰があるって事ね」

「乙女って、処女の事か……」

処女の銀輪に刻まれた、乙女座の紋様を見ながら、魅恵は呟く。

「君は信じて無いみたいだけど、それは本当に女になる指輪なの。」

注意事項を守らないと、とんでもない目に遭うから、気をつけてね」

「分かりました」

分ったと言いながらも、女主人の話を、魅恵は全く信じていなかった。

結局、商店街でもバイトは見つからなかった。家に帰った魅恵は、夕食を食べて風呂に入り、テレビを見てから、自分の部屋に戻って、ベッドに寝転ぶ。

ふと、枕元を見ると、処女の銀輪が置いてあった。魅恵は指輪を、右手の薬指にはめてみる。蛍光灯の光を反射し、煌めくシルバーのリングを見て、少しだけ、魅恵は気分が良くなる。

「今日は、これが手に入っただけで、良しとするか……。また行っ

てみよう、妖シ屋」

時計を見ると、午前十一時過ぎ。次第に睡魔が、魅恵の身体を支配し始めた。

(あ、指輪外さないよ、女になっちゃうんだ……)

魅恵は指輪を外そうとするが、外すのを止めて、くすくすと笑い出してしまう。

(俺、あんなバカな話、信じてるのか?)

女主人の荒唐無稽な話を、真に受けたかのような行動を取ろうとした自分自身が、魅恵は面白くて仕方が無かったのだ。結局、魅恵は指輪をそのままにして、目を閉じた。

(本当に女になってたら、晶姉にウェイトレスのバイトでも、紹介して貰おうと……)

無論、そんな事になど、なる訳が無いと思いつながら……。

「すいません、誰かいませんか？ すいません！」

翌朝、妖シ屋の前には、戸を叩き、叫び続ける魅恵がいた。しかし、返事が返ってくる事は無く、店の中からは、人の気配も感じられなかった。

(参ったなあ……)

本日休業の札を、忌々しそうに睨みつけた後、魅恵は溜息をつく。溜息とはいえ、大きく呼吸すると、少し胸がきつく、魅恵は軽い苦痛を感じる。

身体の大きさは、それ程変わっていないのだが、胸だけが一晩で大きくなったので、魅恵はTシャツの胸の辺りが、きつくて仕方が無いのだ。

(まさか本当に、女になるなんて……)

胸が大きくなったのは、魅恵の身体が女性化してしまい、胸が膨らんでしまったせいなのだ。女主人の言う通り、本当に、身体が女になってしまったのである。

困り果てたように、魅恵はTシャツの胸元をめくって、自分の胸を見る。雑誌で目にするグラビアアイドル程に大きくは無いが、膨らみは小さくは無い。Cカップ位だろうかと、魅恵は根拠無く思う。(どうしよう……これ?)

朝の八時に目覚め、自分の身体が女になっている事に驚愕した魅恵は、妖シ屋の女主人に、元に戻る方法を聞こうと思って家を飛び

出し、妖シ屋に辿り着いたのだ。しかし、妖シ屋は再び、休業になってしまっている。

仕方が無いので、魅恵は家に戻る事にした。

(まあ、女になるって事が本当だったんだから、他の話も本当なんだろうな)

女主人の話を思い出しながら、魅恵は心の中で呟き続ける。

(つまり、今日一日は女のまま、午前霊時前に指輪を外せば、次の日は元に戻る訳だから、それまでの間、警察沙汰とセックスを避ければ、いいわけか……)

見慣れない膨らみ方をしている、自分の胸を見ながら、魅恵は思った。

(つーか、セックスなんかする訳ないじゃん……男相手に)

考えるだけで気持ちが悪くなり、魅恵は足を早めて、家路を急いだ。

「おい、今の娘、ノーブラだぜ」

「乳首透けてたな」

すれ違った、大学生風の二人組の男の会話が、後ろから聞こえて来た為、魅恵は自分が、かなり大胆な格好をしている事に気付いた。ブラジャーなど持っていないので、ノーブラなのは当然なのだが、急いで出てきたので、長そでの白のTシャツを着てしまったのだ。

薄手の白いシャツなので、胸が透けて見えるのは、当たり前である。魅恵は急に、恥ずかしくなってきた。さっさと家に戻る。

(女は服とか、面倒臭いんだな)

さっさと家に帰ろうと、魅恵は走り出した。走ると、反動で胸が揺れるので、魅恵は少し、走り難さを感じる。

(成る程、だからブラジャーが必要になる訳か……)

魅恵は、ブラジャーの存在意義が、胸を隠すためだけでは無い事を、初めて知った。

「あれ？ ミケちゃん……だよな？」

家の門の前で、突然、晶に後ろから声をかけられ、魅恵は心臓が止まりそうになった。

(あ、晶姉！ よりによって、こんな時に！)

女になった姿を、晶に見せる訳にはいかないと、魅恵は思う。そ

れ故、聞こえなかった振りをして、魅恵は家のドアに手をかけ、中に入ろうとする。

だが、晶は素早く魅恵の手を掴み、引き止めた。

「——こんな近くで、聞こえない訳が無いじゃない！」

ジャージ姿の晶は、魅恵を自分の手許に引き寄せて、睨み付けながら、晶は強い口調で続ける。

「ミケちゃん、あたしを無視する気？」

汗の匂いがする。晶が朝のジョギングを欠かさない事を、魅恵は思い出した。魅恵は丁度、ジョギング帰りの晶に出会ってしまったのである。

「違うって！ 今、ちよつと都合が悪い……」

「——ん？」

膨らんだ魅恵の胸を、晶は不思議そうな目で見る。魅恵の身体が、いつもと違う事に、晶は気付いたのだ。

「何、それ？ 女装の練習？」

「あ、そうそう！ ちよつとシャレで女装してみたんだ！」

「ふーん。良く出来てるなあ……」

そう言うと、晶は魅恵の胸を触り始めた。

「ちよつと、晶姉！」

胸から脳に、妙な感覚が伝わるのが気持ち悪くて、魅恵は身をよじった。

「——ちよつと見せて」

魅恵の胸がどうなっているのかが、気になったのだろう。晶は、魅恵のTシャツを捲り上げて、魅恵の胸の膨らみを、直に目にしようとする。

晶の目論見を阻止しようと抵抗するものの、身体が大きい分、晶の方が力が強く、魅恵は晶にされるがままとなる。魅恵は打撃技なら、かなり強い部類に入るのだが、非力な為、身体を掴まれて組まれると、弱いのだ。

「特殊メイク？」

「そう、特種メイクなんだ！ 良く出来てるだろ？」

そう言って、誤魔化そうとした魅恵の両胸を、晶は両手で揉み始めた。今度は、気持ち悪いというより、微妙に気持ち良いという感じがして、魅恵は声を漏らしてしまう。

「あ……ちよつと、晶姉っ！」

(やばい！ 何か、微妙に気持ちイイ……)

「——乳首、硬くなってる。体温もあるし、肌触り本物……。特種メイクじゃないよ、これ！」

「違う、本当に特種メイク……痛っ！」

突如、晶に乳首を強く抓られ、魅恵は痛さの余り、悲鳴の様な声を上げてしまう。痛さで声を上げた後、魅恵は晶の策にはまってしまったのに、気付いた。

「痛い訳無いよね、特種メイクだったら。どうしたの、これ？ 言わないと……」

晶は再び、乳首を強く指で挟んで、軽く抓る。

「痛っ！ 言うよ、言うから止めてっ！」

「そうそう。人間、素直が一番」

魅恵の胸から、晶は手を放す。魅恵は慌てて、シャツを下ろした。

「で、どういう事なの？」

「後で……慎吾の部屋で話すよ」

「絶対だよ」

魅恵は頷いた。色々な意味で、魅恵は晶に頭が上がらないのだ。

朝食の後、魅恵は慎吾の部屋に向かった。胸が透けて見えない様に、Tシャツの上に、厚手のフリースを着て。

部屋に着いた時、既に晶は慎吾と共に、魅恵を待っていた。ジョギングの際の服装ではなく、晶はTシャツとジーンズ姿に、着替えている。

魅恵は結局、妖シ屋に行つてからの経緯を、晶と慎吾に話した。包み隠さず、全てを順序立てて。

晶と慎吾は、信じられないという面持ちで、魅恵の話聞いた。無論、魅恵の胸の膨らみを、初めて目にした慎吾は、話よりも現実の魅恵の身体の方に、遥かに驚かされたのだが。

「——ミケちゃんが、本当に女の子になってなかったら、信じられないような話だけど、現物が目の前にあるからね……」

「俺だって、未だに信じられないし、信じたく無いよ」

「だけど、妖シ屋の人が言う通りになったのなら、指輪外せば、元に戻れるっていうのも、本当なんだろう？」

慎吾は冗談半分といった感じの口調で、問いかけ続ける。

「だったら、別にいいじゃん。それに女の方が、バイト探しやすい

んだから、バイト探す間だけ女になってれば？」

「そうだね。本当に女になれるようになってたんだから、女装しないでも、バイト出来るって事じゃない！ ウェイトレスのバイト、紹介してあげるよ！」

「それは……」

口ごもる魅恵に、女性化した上でのバイトを、晶は熱心に勧める。「せっかく、女になれるようになったんだから、その能力を利用しないの、勿体無いよ。今のミケちゃん、誰が見ても、ボーイッシュな可愛い女の子だし」

鏡で見た自分の姿は、自分でもヤバいと思う程、可愛かった位なので、女の子としてウェイトレスのバイトをしても、誰も変には思わないだろうと、魅恵自身も思う。晶や慎吾の言う通り、バイト探しという意味では、チャンスなのだろうと、魅恵も考えない訳では無い。

「そうだな……。だけど、胸とか痛くて動きにくくて、不便なんだよね」

「ブラすればいいじゃない……。って、持って無いんだよね？」

晶の問いに、魅恵は頷いた。

「姉貴の貸して……。って、ミケには大きすぎるか……」

慎吾は、晶と魅恵の胸を見比べながら、そう言った。晶の方が背が高いせいもあるが、乳房自体も、晶の方が少し大きい。

「スポーツタイプだったら、大丈夫かもよ。あれは生地が伸びるんで、少し小さめの買うようにしてるんだ。ミケちゃんが欲しいなら、あげるけど……。欲しい？」

魅恵は、大きく頷いた。流石に、一人で女性下着売り場に行つて、買う気はしなかったので、少しくらいサイズが違おうが、貰えるのは有り難いのだ。

「だったら、うちに来なよ。サイズ大丈夫か確認して、使えるようだったら、下とセットで、何セットかあげるから」

「マジ？ ありがとう！ バイト代入ったら、何かおごるから！  
ところで、下とセットの下って？」

「ブラだけじゃ、困るだろ？ 女は下着、ブラとショーツをセットで買う場合があるから、ブラとセットになつてるショーツって意味」  
「し、下も……。女物？ 俺、下は男物のボクサータイプとかでいいんだけど……」

「ウェイトレスのバイトするんだったら、女子更衣室とかで着替える事だってあるんだし、男物の下着なんて穿いてたら、不審に思われるよ」

晶に言われ、魅恵は渋々、納得した。

「じゃ、行こうよ」

魅恵は頷くと、晶と共に腰を上げる。

「姉さん、一応言っておくけど、ミケは女の身体になってるだけで、本当は男だって事、忘れるなよ！」

「分かってるよ、そんな事」

慎吾が何故、そんな注意を晶にしたのか、魅恵は少し不思議に思い、理由を聞こうと思った。しかし、晶に背中を押されて部屋を出てしまった為、魅恵は結局、聞き損ねた。

「大丈夫かなあ。姉さん、可愛い女の子に目が無いから……」

慎吾は、心配そうに呟いた。

「これなんだけど……どう？」

葛城家の晶の部屋で、魅恵は晶に下着を手渡された。魅恵は、スポーツタイプの下着の上下を手にとって、眺める。

「通信販売で買ったなら、少しサイズが小さかった、スポーツインナーのセットなんだ。タンクトップやショートパンツっぽい感じだろ？」

少し恥ずかしそうに、魅恵は頷く。

「この手の、女の子っぽく無い下着が好きなんだ。水着っぽいから、ミケちゃんも抵抗無いでしょ？」

晶に手渡された下着は、濃紺のセパレートの水着の様な、シンプルなデザインで、生地面積も広い。

(これなら、まあ……許せる範囲かな)

下着のデザインを見て、魅恵は少し、安心する。いかにも女性用といった感じのブラやショーツを着るのは、流石に気が引けるのだ。

「着てみると、サイズが合うかどうか、分からないな……」

「だったら、着てみれば？」

「着替えるところ……ある？」

「ここで着替えればいいじゃない」

晶は、事も無げに言った。

「ここで……」

「あたしの事は、気にしないでいいよ。だって、今のミケちゃん、

女の子なんだから。女の子が女の前で着替えるの、当たり前じゃない？」

「だけど、俺は本当は……」

「あたしが紹介する、ウェイトレスのバイトするのなら、更衣室で、他の女の子の前で着替えなきゃなんないんだよ。その程度の事を恥ずかしくてたら、女の子のふりしてバイトするのなんて、無理じゃないかな？」

「——分かったよ」

バイクを貰う上に、バイトを紹介してもらい、おまけに下着をくれる晶に逆らって、機嫌を害する事は、魅恵は可能な限り避けたい。それに、今の身体は女の子そのものなので、晶からすれば、見なれた裸の筈だし、魅恵にとっても、見られたら恥ずかしいモノが、消えてしまっている。

(脱いだところで、問題になる事も無いか……)

魅恵は、そう自分に言い聞かせて、服を脱ぎ始めた。フリースとジーンズを脱いだ後、少し躊躇って、裾が長いシャツで、股間を隠しながら、トランクスも脱ぎ捨てる。

そして、ショーツの方を手を取って、一気に穿く。

「どう？」

「丁度……かな？」

ショーツは、魅恵のサイズにぴったりだった。身体を動かしてみるのが、ずれ落ちたりする様子は無い。

「次は、ブラか……」

魅恵は晶に背中を向けて、少し恥ずかしそうに、シャツを脱ぐ。

水着の様なブラを手に取り、頭から被って身に着ける。

「こっちも少し緩いけど、大丈夫だと思う」

全身を映せる鏡の前に行き、魅恵は自分の姿を映してみる。鏡の中にいる自分の姿が、予想よりも可愛くて色っぽかったので、魅恵は少し驚いてしまう。

「水着姿の女の子って、感じだよな」

晶の言葉に、魅恵は頷く。魅恵自身にも自分の姿が、セパレートの水着を着ている少女の様に、見えたのである。

鏡の中に、晶の姿が映る。晶が魅恵の後ろに、移動したのだ。

「前から思ってたんだけど、ミケちゃんって本当に可愛いよね。男にしておくの、勿体無いくらいに……」

そう言いながら、晶は魅恵を、後ろから抱き締めた。まるで、背の高い青年が、恋人の少女を後ろから抱く様に。

魅恵は、晶の突然の抱擁に驚く。

「あ、晶姉……？」

「ミケちゃん、あたしの事……好きだろ？」

「え？」

自分の晶への恋愛感情が、晶にばれていたと知った魅恵は、恥ずかしさで赤面し、頭の中が混乱してしまふ。そして、どうリアクションしていいか分からなくなってしまい、魅恵は晶の為すがままになる。

魅恵の反応を楽しむように、晶は魅恵の身体を撫で回す。

「あたしも、ミケちゃんの事は、男の子の中では一番、好きだったんだ。けど……あたしって、女の子の方が好きなのよね、恋愛対象としては」

(女の子の方が好き?)

魅恵は、自分の耳を疑った。

(それって、ひよっとして……)

晶は魅恵の両胸に手を移動し、ブラの上から胸を触りながら言った。

「つまり、レズって訳。男の子は、恋愛とかセックスの対象にはならないの……」

自分がレズだという晶の告白は、本来なら魅恵にとって、相当にショックな出来事である筈なのだが、今の魅恵は、その程度の事に驚いている場合では無かった。晶の告白よりも行動の方が、遥かに衝撃的だったのだ。

晶の右手が、魅恵のブラをめくり上げ、胸に直接触れ、愛撫を始める。左手は、ショーツの上から、股間を撫で始めた。

「——あ、晶姉、どこ触って……あっ！」

女性の身体になって、股間を触られるのが初めての魅恵は、未知の感覚に身体を硬直させ、吐息を漏らしてしまふ。

「はあ……」

愛撫に魅恵が反応したのを確認し、晶の言動は、更に大胆になっていく。

「男相手にセックスする事なんて、一生無いと思ってたんだけど、まさかミケちゃんの身体が、女になるとなね……」

「身体が一時的に女になつてただけで、俺は男だつて！」

「分かつてるけど……そんな事、気にならない位に、ミケちゃんが可愛いから、こういう事、したくなっちゃうんだよね……」

晶は、右手を胸から放し、魅恵の頬に手を当てて、後ろを向かせた。そのまま強引に、唇を重ねる。

「んっ……ん……」

大好きな晶相手のキスなのだから、喜んでもいい筈なのだが、魅恵は複雑な気分だった。女性の身体で、レズだった憧れの女性に唇を奪われるという、倒錯的なシチュエーションのせいで、魅恵は素直に、晶とのキスを喜べないでいたのだ。

魅恵の唇を割り、晶は舌を絡めて来る。その間も、晶の両手は、魅恵の全身を這い回っている。

晶の愛撫によって、次第に身体が熱くなり、男の身体で自慰をしている時と同じ種類の感覚が、魅恵に襲い掛かりはじめる。晶の愛撫によって、魅恵は性的な心地良さを感じ始めたのだ。

(やばい！ 気持ち、良い……)

無論、魅恵の身体は、素直に快感に反応した。男の時にも先走りが出るように、女の身体でも、股間を先走りの液体が、濡らし始めたのである。しかも、晶がショーツの中に右手を挿入し、股間の割れ目に指を這わせ始めた直後に。

「ミケちゃん……濡れてるよ」

感じている事を晶に指摘され、魅恵の中で、何かが吹っ切れてしまふ。まるで熱が出ている時のように、魅恵の頭の中は、ぼやけ始める。

理性的な思考力が衰えつつあるのを、魅恵は自覚する。

「あ……ん、やあ……」

中指の先端で、晶が魅恵の一番敏感な部分に、小刻みに振動を加え始めた。そのまま二分程、股間や胸への愛撫を続けてから、晶は魅恵への愛撫を止め、魅恵から身体を離す。

(――止め……ちやうの?)

頬を火照らせたまま、魅恵は戸惑い気味の表情を浮かべ、晶の出方を窺う。

「続き……して欲しい？」

「え？」

「して欲しいなら、してあげる」

晶は魅恵の耳朶をくすぐる様に、耳元で囁き続ける。

「嫌なら、今からバイト先、紹介してあげるよ。どうする？」

(そんな……)

性的な興奮を高められたまま、途中で止めるのは、意外と辛い。中学の時、自慰の途中に、家族が部屋に入ってきて、中断した時のやるせない気分を、魅恵は思い出す。

(こういう気分、身体が疼くとかいうのかな?)

火が点き、身体の奥底で燻ぶり始めた欲望の炎を意識しつつ、魅恵は思い悩む。

「どうする？」

魅恵は悩んだ末、答えを出した。

「——やめとく」

魅恵が自分の誘いを断る訳が無いと確信し、強引には無く、本人の合意を得てから、魅恵に本格的に手を出そうと思っていた晶は、心の中で舌打ちをする。しかし、このまま魅恵を諦めるつもりも、無かった。

「残念だな。ミケちゃんが女の子の身体になれるなら、彼女になっ  
てあげてもいいって、思ってたんだけど……」

ジーンズを手に取り、穿こうとしていた魅恵の動きが、止まる。

「——本当？」

「今、付き合ってる女いないから……ミケちゃんだったら、本気で  
付き合ってもいいよ」

「だけど、男だよ……俺。男じゃ駄目なんだろう？」

「セックスする日だけ、女の子になつてくれれば、問題無いじゃない  
い」

「晶姉の事は好きだけど、俺……男なんだ。男として相手してくれ  
ないんだったら、付き合うのは嫌だよ」

魅恵に拒否された晶は、少し考えてから、言った。

「——だったら、交互にしない？」

「交互？」

「あたしが女の子のミケちゃんを抱いたら、次は男に戻ったミケちゃん  
んが、あたしを抱くって訳。それなら、お互いに楽しめるでしょ  
う？」

「いいの、男の俺と……しても？」

「——うん。大丈夫だよ……大丈夫に決まってる」

本心では男の身体の魅恵との行為は、気が進まないのだろう。晶は自分を納得させるかの様に呟きながら、頷く。

「どう？ 悪い話じゃ無いと思うけど」

魅恵は、悩み始める。晶がレズだという事には驚いたが、それで恋愛感情が冷めたかと言え、やはり、晶の事は好きだった。しかし、性別を変えながら付き合うのは、魅恵には難しい様に思えたのだ。

突然、晶がTシャツを脱ぎ始めた。上半身が、魅恵が身に着けているのと同じタイプのブラだけの姿になる。晶は、そのブラも、あつという間に脱ぎ捨て、上半身裸の姿になる。大きくは無いが張りがあり、瑞々しい果実のような両の乳房が、露になる。

「ちよつと、晶姉！」

憧れの相手の胸を見て、魅恵は慌てる。自分にも同じ物が付いていると言っても、脳の中が男である魅恵にとって、女性の胸は、逃れ難い魅力があるものなのだ。晶は両手で、魅恵の右手を取って、自分の左胸に誘った。柔らかく暖かい感触が、魅恵の手に伝わってくる。

「男の子だったら、好きだよね……おっぱい。付き合ってくれるのなら、好きにしていんだよ……これ」

魅恵は少しの間、迷った後、意を決したかの様に頭を下げ、晶の右胸の先端に口を付けると、舐め始める。左胸に誘われたままの右手は、激しく晶の右乳房を揉みしだく。

晶は軽い吐息を漏らし、胸に埋まる魅恵の頭を、愛おしそうに抱き締めた。

(考えてみれば、あたしにとってミケちゃんって、ベストなパートナーよね)

胸を魅恵に与えながら、晶は思う。最初は、女になった魅恵が、余りにも可愛いかったので、つい勢いで手を出してしまったのだが、今の晶は本気で魅恵の事を、自分にとって最適なパートナーだと、思い始めていたのだ。

実は、前の彼女と別れてからの数ヶ月間、セックスをしていなかった晶は、かなりの欲求不満状態だったのである。だからといって、レズ用の出会い系サイトなどで、遊びだけの相手を探す程、晶は軽くは無い。

身体の関係を持つ相手は、晶の場合、恋人である場合が殆どである。恋人がいない場合に欲望を満たす為、身体を重ねる相手であっても、ある程度以上は親しい相手……ちゃんとした人間関係を持っている相手の方が望ましいと、晶は思っている。

家族や彼女だった女性達以外で、魅恵は晶にとって、最も親しい相手だったので、ある程度以上は親しい相手という意味合いでは、何の問題も無い、しかも、魅恵が自分に対して、恋愛感情を抱いている事も、晶は気付いていた。

晶は、男性からも言い寄られる事が多かったのだが、男から寄せられる好意は、はつきり言つて、不快以外の何物でも無かった。しかし、魅恵からの好意は、晶には気分が良かったし、自分の特殊な性的趣向のせいで、応えてあげられない事に、罪悪感すら覚える程だったのだ。

そんな時、魅恵自身が女の子の身体になって、目の前に現われたのである。気心の知れた親しい相手の上、自分に好意を寄せてくれている魅恵が女の子になったのを見て、つい、欲求不満解消の相手にしてしまおうと、晶は思ってしまったのだ。自分に恋愛感情を抱いてるだろう魅恵にとっても、自分が相手なら、嫌がりはしないだろうと思つて。

しかし、性欲を満たす為だけに関係を結ぶ事を、晶は魅恵に拒まれてしまった。そこで短い時間の間に、魅恵と自分の事を、良く考えてみたところ、魅恵は自分にとって、かなり魅力的な存在である事に、晶は気付いたのだ。

同性愛者としての性的趣向のせいで、一般的な意味合いでの結婚や子作りを、晶は諦めていた。ところが、女性の身体に変われるようになった魅恵は、晶にとって性的な対象になる上、結婚も出来るし子供も作れる相手なのだ。

しかも、晶にとって魅恵の外見や性格は、昔から好ましかったりもするのである。今現在も親しい相手で、結婚や子作りが可能な上、性欲を満たす相手にもなり、外見や性格までも好みである魅恵は、人生のパートナーとしてベストの相手である気が、晶にはしてきたのだった。

無論、晶にとって男の魅恵に抱かれるのは、多少どころか相当な抵抗がある。しかし、元から見た目は女の子に見える魅恵なら、何とか堪えられそうに、今の晶には思えた。

(まあ、とにかく今は、女の子になったミケちゃんを、楽しませて貰おうと)

「ベッドに行こうよ……」

晶は魅恵を、ベッドに誘う。胸から顔を離して頷く魅恵を、軽々と抱き抱えると、晶はベッドの上まで魅恵を運び、仰向けに寝かせ

る。  
ベッドの脇に立った晶は、ベルトを外してジーンズとショーツと靴下を脱ぎ捨て、全裸になる。そして、仰向けのまま見上げている魅恵の上に、舌で唇を舐めながら押し掛かる。

二人分の体重に、スプリングが軋む。反動で弾むベッドが、晶と魅恵の身体を揺らす。

身体を重ねた晶は、魅恵の唇に、自分の唇を重ねる。そのまま、魅恵のブラを上にくくり上げ、露になった胸を、両手で揉み始めた。  
(ちよつと、硬めだな)

丁度、手に収まるサイズの、魅恵の乳房の感触を、晶は楽しみながら、揉み続ける。

「ん……ん」

(結構、感度は良いみたい)

感じている事を示す、魅恵の呻き声を聞いた晶は、唇を外して、魅恵に問いかける。

「乳首……吸われた事、ある？」

「——ある訳、無いだろ」

「嬉しいな、初めてなんだ」

晶は嬉しそうに、魅恵の右の乳首に口を付け、強く吸った。左の胸は、右手でソフトに揉み続け、左手は魅恵のショーツに伸び、下に下げる。

手が届かない所まで下げたショーツを、晶は足を使って、器用に脱がした。ショーツは、魅恵の左足の先に、引っ掛かっているだけになっている。

むき出しになった魅恵の股間の、薄い毛を指に絡め、軽く弄んだ後、晶は割れ目に指を這わせ始める。既に粘液で滑り始めているので、下の唇は開いているが、膣口の感触は硬い。

陰唇の上の、まだ皮を被っているクリトリスの皮を左手で剥き、中指と人さし指で摘み、晶は適度な強さで刺激する。

「ふぁ……ん……あう」

両胸と同時に、最も敏感な場所を愛撫された魅恵は、快感に息を荒げ始める。粘液の分泌量が十分に増え、堅く閉じていた膣口も、弛み始める。

晶は人さし指での刺激を続けながらも、中指をゆつくりと、膣の中に沈め始めた。すでに十分に濡れている魅恵の膣は。多少の抵抗をしながらも、晶の指を飲み込んでいく。

「う……ん……」

晶が指先に、強い抵抗感を感じた直後、魅恵が軽く呻き、身体を振る。

（――処女膜かな？）

指先の感触から、晶は推測する。膜といっても、言葉のイメージとは違って膜状の物では無く、膣内が狭まっている堰の様なものなので、貫く様に決じ開ける時には、それなりの痛みを伴う場合が多い。

（痛くしたら……ミケちゃんが抵抗し始めるかもしれないな）

まだ女になったばかりの魅恵に、痛みが伴う程の行為を行えば、女の身体での性行為に対する、魅恵の抵抗感を高めるだけだと思っ、それ以上の侵入を、晶は諦める。無論、魅恵の処女膜は、自分の指かレズ用の疑似ペニスを使い、自分で貫くつもりなのだが、焦るのは禁物だと、晶は思ったのだ。

（いかせるだけなら、そこまでする必要も無いしね）

晶は指を抜いて、股間から左手を離れた。そのまま、左手で魅恵の右胸を愛撫し始め、身体を下にずらす。

ずらしながら、おなかやへそなどを軽く舐め、晶の顔が、魅恵の股間の正面に移動する。

（綺麗……。やっぱり、初物はいいな）

完全に未使用品である魅恵のモノは、色素の沈着も無く、見事な薄目の桜色をしていた。初物好きの晶は、嬉しそうに魅恵の股間に、舌を這わせ始める。

股間を舐められて驚いたのだろう、魅恵が脚を閉じたせいで、頭を太股で挟まれてしまうが、晶は構わずに舌と唇を使って、魅恵の股間を責め続ける。女の身体を知り尽くしている晶の手にかかれれば、少女の身体となった魅恵を、口と手だけで翻弄する事など、訳も無い。

次第に、魅恵の呼吸が荒くなり始める。

「ふあ……あ、ん……ん……あ……」

魅恵が感じていただけでも、いわゆるタチ……男役である晶は、気分が良いし、昂っても来るのだが、やはり愛撫も欲しくなる。晶は一度、魅恵から身体を離して、自分の股間が魅恵の顔の真上に来る様に、身体の向きを変えた。

魅恵は初めて、真近に女性器を見た。しかも、それが憧れ続けて来た晶のモノだったので、魅恵は喜びに満たされてしまう。

「ミケちゃん、アタシにも……お願い」

晶はゆっくりと股間を下ろし、魅恵の顔の上に跨る。

「手は、こっち」

魅恵は晶の手と声に誘われ、両手を晶の胸に伸ばす。晶の行為を真似して、魅恵は晶の股間を舐めつつ、胸への愛撫を始める。

既に十分に濡れていた、晶のクリトリスや膣口付近を、魅恵は舌で舐め回す。張りの有る乳房を、優しく揉みしだく。

「そう……そんな感じ。続けて」

晶も、魅恵への愛撫を再開する。顔を股間に埋め、手は胸に伸びる。そのまま五分程、二人はシックスサインの体位で、互いに奉仕し合い続けた。

（もうそろそろ……かな？）

声と息遣いから、魅恵が絶頂を迎えそうだなと、晶は察する。

（――あたしも……なんだけどね）

魅恵は晶のやり方を真似ている分、意外にも手や口での行為が上手く、晶も絶頂を迎える手前まで、上り詰めようとしていた。

（そう言えば、何をやっても器用な子だったもんね、ミケちゃん。この手の事を覚えるのも、早いつて訳か……）

すでに十分に昂ぶっている二人に、強い刺激は必要無い。晶は姿勢を変え、自分の陰唇で、魅恵の陰唇を塞ぐ様に、身体を重ねた。男と女なら、側位と言う体位になる。

側位なら顔を見れるし、キスも出来る。おまけに胸を愛撫する事も出来るので、晶は側位が好きなのである。

無論、実際に繋がっている訳では無いし、デイルドなどの疑似ペニスを紹介して、繋がっている訳でも無い。一見、女同士のセックスでは、無意味な体位に思われがちだが、十分に昂り、後は絶頂を迎えるだけという段階なら、程良い刺激が、寧ろ丁度良い位なのだ。

晶は、魅恵と唇を重ねる。上と下の唇を、重ね合う形になってい

る。そのまま、舌を絡ませ合い、手は、お互いの胸や脇腹を這い回っている。

股間への微妙な刺激は、二人を次第に、頂点に上らせて行く。

「ふあああ……う……ああ……」

声にならない声を上げながら、魅恵は全身を、激しく震わせる。先に達したのは、魅恵だったのだ。男の身体の時の、自慰で感じる際の快感と、快感の度合いでは同等ではあっても、比べ物にならないだろう長さで続く、快感の波に流された魅恵は、晶の身体に縋り付く。

「あたしも……ん……」

魅恵が達したのを確認してから、晶は腰の動きを激しくして、自分への刺激を強める。程なく、晶も魅恵を追い掛けるように、達する。

「くあ……う……あ……ん……」

晶も、声を上げ始める。頭から腰までの身体の軸といえる部分に、凄熱を感じ、頭の中が熱と光で、白くなって行くような気分になり、晶は満たされる。

(気持ち……イイ……)

光と熱が、自分の全身に満ちて行くように、晶は感じる。そのまま、絶頂と、その手前とを行き来出来るような、程良い刺激を、お互いの身体が感じるように、晶は腰を揺さぶり続けた。

その後、絶頂付近を彷徨い続けた二人の性感が、十回近く達した後、晶は満足したように、股間を合わせるのを止めた。そして、普通に魅恵を抱き締めたまま、後戯に入る。

仰向けになって、魅恵はぐったりと、魅恵を投げ出す。荒れている呼吸で上下する胸の上では、汗と唾液の混ざり合った体液で滑る乳房が、震える様に揺れている。

晶は、そんな魅恵の身体を、愛おしそうに撫で回し続けた。

「男よりも女の方が、性的な快感は凄いついていうけど、どうだった？」

「——似たようなもんだよ」

(本当は、女の身体の方が凄……っていうか、気持ちいい時間が、長いけど)

女の身体の方が、快感の続く時間が長い事を、魅恵は身を持って

知った。当然、女の身体の方が総合的には、性的な快感は凄いと云っても良いのだが、その事を認めてはいけないような気が、魅恵にはしたのだ。

「そうなんだ……。実際に比べられるの、ミケちゃんだけだもんね」  
晶は服を着ながら、残念そうに感想を口にする。

「ミケちゃんが、そう言うなら、そうなのかな……」

恥ずかしかつたので、晶より先に着替え始め、すでに着替え終えた魅恵は、ベッドに腰掛けている。ちなみに、身に着けている下着は、女物である。

「それにしても、初めてにしては、凄かったね」

「——晶姉が、上手いからだよ」

「まあ、女の子相手にするの慣れてるから、あたしは」

微笑みながら、晶は続ける。

「それに、女だから……。どうすれば女の子が気持ち良くなるかも分かるしね。だけど、ミケちゃんも初めてにしては、上手かったよ」

「ありがと……。今日は晶姉に合わせて、女の身体でしたけど、今度俺に合わせてよね」

「分かってるよ」

そう言いながら、晶は魅恵と、軽く唇を合わせる。

「そうだ、ウェイトレスのバイト、本当にやるの？」

魅恵は頷いた。

「免許欲しいから……。晶姉とツーリング行きたいし」

既に恋人関係になったので、晶との距離を近付けるという、当初の免許取得目的は、無意味なものとなったのだが、バイクで行動する事が多い晶と付き合うなら、やはりバイクの免許は、必要なのだ。やはり、春休みはバイトに費やさなければならぬと、魅恵は思う。

「だったら、すぐに申し込んだ方がいいよ。先に誰かが、決まっちゃうかもしれないから。ちよつと待ってて」

携帯電話をジーンズのポケットから取り出して、晶は電話をかける。始める。

「あ、カンナ？ カンナが働いてるレストランのバイト、もう決まっちゃった？ まだ？ 良かった、一人、紹介したい娘がいるんだけど……。うん、高校生。可愛い事は、あたしが保証するよ。だって、あたしの彼女だから」

彼女だと紹介したという事は、晶がレズだと知っている友人なの

だろうと、魅恵は推測する。出来れば彼女では無く、彼氏だと言つて欲しいんだけどなど、魅恵は思う。

「——分かった。有難う、バイバイ」

晶は電話を切った。

「これから面接だつて、いいよね？」

魅恵は、頷いた。

自宅の最寄り駅である破魔崎駅さかどきせんから、坂崎線さかどきせんで二十分程の坂崎市さかどきしに、魅恵は来た。この辺りでは一番大きい都市で、晶の通う大学も、坂崎市にある。もつとも、晶は高校の頃からバイク通学してたので、電車とは無縁らしい。

晶に紹介された店……ハーベストは、駅前の繁華街にあった。古い洋館の様な、レトロなデザインは、かなり目立っている。

ドアに掲げられた、「準備中」と書かれたプレートのかかったドアを開けて、魅恵が店内に入ると、明るい女の子の声が出迎えた。

「あの……今、休憩中なんですけど……」

メイド服に身を包んだ、女の子のウエイトレスが、魅恵に声をかけた。栗毛のポニーテールの、魅恵と同じ位の年の娘である。

リスっぽいイメージの顔だが、背は魅恵と同じ位あるので、女の子にしては、高い方だろう。テーブルで読書中のように、分厚い本を手にしていた。

(俺も、あのメイド服みたいなの、着るのか……)

この店で、ウエイトレスのバイトをする為には、栗毛のウエイトレスが着ているのと同じ、メイド服を着なければいけない事に気付いて、魅恵は少し、恥ずかしくなる。スカート系の服には、やはり多少の抵抗を、魅恵は感じてしまうのだ。

「バイトの面接に来たんですが……」

「あ、カナナさんの友達の紹介の？」

魅恵の事を知らされていたらしい、栗毛のウエイトレスは、魅恵を店の奥に誘う。

栗毛のウエイトレスに案内された、事務室と応接室が混ざったような部屋で、魅恵がソファに座って待っていると、二人の女性が現われ、魅恵の向い側の席に腰掛けた。一人は、四十前後の、少し

肉付きが良く、驚く程に、胸のボリュームのある中年女性。もう一人は、二十歳前後の女性。どちらも、魅恵より少しだけ、背が高い。若い方の顔と名前は、晶に写真を見せて貰っていたので、魅恵は知っていた。晶の友人の、みなかた南方カンナである。

カンナは涼しい目をした、落ち着いた感じの女で、中年女と、顔が良く似ている。晶には、カンナの母親の経営するレストランだと聞いていたので、中年女の方は、店主である母親の方だろうと、魅恵は推測する。

三人は、型通りの挨拶と自己紹介をした。案の定、中年女はカンナの母親の南方スマイレで、この店のオーナー店主兼料理人だった。

魅恵はスマイレに、履歴書を手渡す。無論、履歴書の性別は女性に変えてある。名前は、女でもおかしく無いので、そのままだ。

スマイレは履歴書に目を通しながら、時給や勤務時間などを、魅恵に簡単に説明した。時給は九百円と、高校生にしては十分な額で、勤務時間は午前十時から午後六時までの八時間。

休憩時間は、午後二時から三時までの一時間。しかも、交通費と昼食が支給されるそうなので、魅恵にはかなり、条件が良いバイトだった。

「高校〇年生ね……。出来れば、明日からでも入って貰って、四月五日までフルで働いて欲しいんだけど、大丈夫？」

「はい」

「良かった」

スマイレは、嬉しそうに微笑んだ。

「今年の春で、大学生だったウエイトレスの娘が、三人一度に卒業して、バイト辞めちゃったのよね……。新学期からのバイトは決まってるんだけど、春休みの間、ウエイトレスが足りなくて、困ったのよ」

「お陰で、私が春休み返上で、家業の手伝いさせられる羽目になってるんだ。君がバイトに来てくれると、多少は休める様になるから、有り難いな」

苦笑しながら、カンナは続ける。

「手伝うのは構わないんだけど、春休み全部、フルタイムで働かされるのは、流石に辛いんでね、晶に頼んでたのよ……。誰か可愛い子、紹介してって。晶は可愛い子の知り合いが、多いから」

「可愛いくないと、駄目なんですか？」

「いや、そんな事無いんだけど……うちのウェイトレスのコスチュームって、着るのに度胸が要るのよ。ある程度、ビジュアルに自信無いと、着れないでしょ？」

カンナは、着ているメイド服のスカートの裾を持ち、広げた。

「確かに……」

（――似合う似合わないという意味では、ハードルの高いコスチュームだな）

魅恵はカンナを見て、そう思う。カンナも、本を読んでいた栗毛のウェイトレスも、このコスチュームを自然に着こなせるのは、ビジュアル的には、それなりのレベルに達しているからだと言える。

特に母譲りのカンナの胸は、かなりのものだ。雑誌で見かけるグラビアアイドル並に、カンナの胸は大きい。

魅恵は頭の中で、晶の胸と比べてしまう。

「こんなコスチュームだから、面接受けに来た子でも、制服が恥ずかしいって、バイト断って帰っちゃうんだよね。全く、普通の制服にすれば良かったのに……」

「だって可愛いわない、メイド服って！」

「いい年して、可愛いモノ好きなんだから……。メイド服が普通な秋葉原のメイド喫茶ならともかく、普通の店のウェイトレスで、メイド服着てウェイトレスするの、結構恥ずかしいんだよ」

カンナは、呆れたように言った。メイド服を制服にしたのは、スミレなのだ。

「ま、君は問題無いよね、似合いそうだし。えーっと、ミケちゃんて呼んでいい？」

「あ、はい」

晶からカンナは、魅恵のあだ名を聞いているようだった。

「バイト、決定でいいね？」

「はい、喜んで」

「じゃあ、これから仕事内容教えて、制服も合わせるから……ついて来て」

立ち上がって歩き出したカンナの後に続き、魅恵も歩き始める。店の奥に向かって。

三十分程の時間で、魅恵はウェイトレスのバイトの業務を、カン

ナと未来に教えられた。未来は、本を手にしていた、栗毛でポニーテールのウェイトレス……さかき みく 榊未来である。

注文は、PDA風のデバイスに入力するだけで、覚える事は、特に無い。配膳も、運動神経抜群で器用な魅恵にとっては、簡単な事だった。魅恵はすぐに、ウェイトレスの業務を覚えた。

三十の座席を、二人のウェイトレスで担当する事になっている上、流行ってる店なので、食事時は忙しいのだと、魅恵はカンナに告げられる。

「じゃ、次は制服合わせだね」

カンナは、魅恵を更衣室に連れて行った。

「これ、着てみて。未来と同じサイズだから、大丈夫だと思うよ。ミケちゃん、未来と背もスタイルも似てるから」

カンナに手渡されたメイド服を受け取る。

(これを……着るのか)

メイド服を眺めていると、どんどん着る気分が、殺がれてしまう気がしたので、魅恵は深く考えず、さっさとメイド服に着替える事にして、服を脱ぎ始める。

(ちよっと恥ずかしいけど……)

カンナが見ている前では、少し恥ずかしいのだが、女が女の前で着替えるのを躊躇うのは、変に思われると思い、魅恵は恥ずかしさを堪えて、下着姿になった。

まず、ブラウスを着て、紺色のワンピースを、履く様に着る。前が開いているタイプなので、ボタンを留めるのは楽だった。思った以上に、膝丈が短い。

膝上二十センチ程なので、スカートで言えば、立派なミニである。紺のオーバーニーのソックスがセットになっているので、足の露出は殆ど無いのだが、やはり魅恵には、かなり恥ずかしい格好だった。ブラウスとワンピースは地味なのだが、メイド服だけあって、その上の装飾は派手である。エプロンは胸当てのあるタイプで、肩も裾も、見事にフリルで飾られている。おまけに、カチューシャまでもが、フリルで可愛らしく装飾されているのだ。

「これ、何ですか？」

良く分からない布を手に取り、魅恵はカンナに尋ねる。

「サツシュよ。腰に巻く奴なんだけど、普通は使わないから、知らないよね」

感じの良い笑顔で、カンナは答えを返す。新人に教える事には、慣れているらしいカンナは、サツシュのついでに、クロス・タイやカフスなどの付け方を、魅恵に教える。

「エプロンとワンピースは、店がまとめてクリーニングに出すけど、ブラウスとソックスは、三セット支給するから、毎日洗濯してね。あと、靴は暗色系。メイド服とコーデイネートしないと、変になるから」

「分かりました」

メイド服を着終わった魅恵は、ロッカーの内側に設置してある鏡に、自分の姿を映してみた。

(げ！ 似合ってやんの)

自分でも驚く程、メイド服は魅恵に似合っていた。

「似合うよ、凄く可愛い」

カンナは、素直な感想を述べた。

「ミケちゃん……晶の彼女なんだよね？」

突然、晶との関係に話が変わったので、魅恵は少し驚いた。

「そうですね……」

「——珍しいな、晶がボーイッシュな感じの娘と、付き合うのって」  
魅恵の顔を見詰めながら、カンナは話を続ける。

「今まで、晶が付き合ってた娘って、どっちかっていうと、いかにも女の子って感じの娘ばかりだったんだ。ミケちゃんも可愛いんだけど、晶と同じで、男の子っぽい感じなんだよね……」

(そりゃ、そうだよな。本当は男なんだから……)

心の中で、魅恵は苦笑する。

「あ、ご免。晶の昔の彼女の事なんか、聞きたく無いよね」

昔の彼氏とかなら、嫉妬するかもしれないが、彼女というのは、どう反応して良いものか分からない。特に聞きたい話でも無いので、魅恵は一応、頷いておく。

「その年だと……晶が初めての相手だったりするの？」

どう答えるべきか分からず、魅恵は黙ったまま、答えなかった。

「そうなんだ」

魅恵の反応から、既に晶と身体の関係がある事を察したカンナは、悪戯っぽく笑った。

「高校〇年でしょ？ 早いな……」

「カンナさんは、恋人……彼氏とかいるんですか？」

「それが、恥ずかしい話になるんだけど、今までいた事が無いのよね、彼氏とか」

女性的な魅力に溢れるカンナに、彼氏がいた事が無いという話を聞いて、魅恵は意外そうな顔をする。

「お陰で二十歳過ぎだっていうのに、まだ経験が無いのよね、男とは……」

カンナは、恥ずかしそうに言った。

「中高と女子高で、男と縁が無かったから、大学ではって思ってたんだけど、大学通って、店の手伝いやってたら、彼氏作る暇も無くてね……未だに処女よ、処女！」

「カンナさん美人なのに、勿体無いですね」

「有難う」

「胸だって、凄く大きいのに」

魅恵は、カンナの胸に目を遣る。

「でしょ？ 宝の持ち腐れって奴よね。しばらく使い道無いから、良かったらミケちゃん、使う？」

魅恵の左手の手首を掴み、カンナは自分の右胸にあてがう。

(うわ……たふたふして、指が埋まっちゃう)

柔らかな感触に魅了され、揉みたいという誘惑に負けそうになったが、魅恵は右手を引つ込めた。

「——晶姉に怒られるから、止めときます」

「晶は、そんなに嫉妬深く無いから、大丈夫だと思うけどな……」

カンナは、少し残念そうに言った。

「だって、自分の彼女を、他の人に……あ」

「彼女を、他の人に……何なんですか？」

話の途中で口ごもった、カンナの様子が気になったので、魅恵は問いかける。

「——ミケちゃんが他の女の子とエッチしたら、晶が怒るって、ミケちゃんが思ってるって事は、ミケちゃんは晶に、あの趣味の事は聞いて無いんだよね？」

「あの趣味？」

「晶には、ちよっと変わった趣味があるのよ。晶が自分でミケちゃんに言っていない事、私が言ったら駄目だから、教えないけど。ま、

大した事じゃ無いし、その内分かるだろうから、気にしないで」  
(そういう言い方されると、余計に気になるんだけど……)  
魅恵は思ったが、カンナはとぼけて、それ以上、魅恵の問いには、  
答えなかった。

帰りがけ、坂崎市の繁華街にあるディスカウントショップで、千  
円の黒いパンプスと、安売りされていたインスタント食品を買って、  
魅恵は家に帰った。家には、誰もいない。

去年の夏、父親の沖縄転勤に合わせて、母と二つ年下の妹……

伊月は、沖縄に引越してしまったのだ。魅恵を一人だけ、破魔崎  
に残して。

一人だけ破魔崎に残されたのは、魅恵が地元では、偏差値の高い  
進学校……破魔崎高校に通っている為、せっかく進学校に入ったの  
だからと、両親が転校させたがらなかったせいである。魅恵自身は、  
沖縄には住んでみたかったので、少し残念に思っているのだが。

(母さんや伊月が、服とか靴を置いて行ってくれたら、良かったの  
にな……)

母も伊月も、服や靴を、残らず沖縄に持って行ってしまったのだ。  
置いて行ってくれていたのなら、サイズが合わないかも知れないが、  
無いよりは増しだろうなど、魅恵は思ったのである。

家の固定電話に、留守電が入っている。ボタンを押すと、晶の声  
が、再生された。

「家に帰ったら、連絡頂戴！」

晶らしい、シンプルな伝言だった。

(そういえば、携帯……オフにしてたんだっけ)

携帯電話が繋がらない上、メールの返信も無い事から、魅恵が携  
帯電話の電源を、オフにしたままなのだ。晶は気付いて、家の電話  
の方に連絡を入れておいたのだろう。魅恵は早速、晶の携帯に連絡  
を入れ、バイトが決まった事や、明日から働き始める事などを告げ  
る。

自宅にいた晶は、今から魅恵の家に行くと言った後、電話を切っ  
た。程なく玄関の呼び鈴が鳴る……両手にバッグを持った晶が、魅  
恵の家を訪れたのだ。

「どうしたの、それ？」

「ミケちゃんサイズが同じくらいの友達の家回って、要らなくなった女物の服、貰って来たんだ」

「女……物？」

「毎日、男物ばかり着てたら、怪しがられるかも知れないじゃない？」

「——まあ、それは……そうだけど」

「ちやんと、女物も着ないと駄目だよ」

晶は有無を言わず、魅恵を引きずるように、魅恵の部屋に行き、バッグの中から二十着程の服を取り出し、床に広げた。スカートにブラウス、トレーナーにショートパンツ、ワンピースにジーンズ、タンクトップにキャミソールなど、様々な種類の服が、揃っていた。

「キャミソールはいらないよ、幾ら何でも」

「そう？ 色黒のミケちゃんには、こんな感じの黒のキャミソールが、似合うと思うんだけど」

黒いキャミソールを手にとつて、魅恵の身体に当ててみながら、晶は残念そうに呟く。

「取り合えず、サイズが合うかどうか、一通り着てみてよ」

「今？」

「当然」

魅恵は、晶が持つて来た服を、一通り試着してみた。殆どの服のサイズは、魅恵にぴったりだった。

当初は着るつもりが無かった黒のキャミソールを、晶のしつこい勧めもあり、魅恵は一応、身に着けてみる。デニムのショートパンツを穿いた上で。

全身が映る鏡の前で、魅恵はポーズをとってみる。すると、晶の言っていた通り、黒のキャミソールは魅恵自身も意外に思う程に、似合っていた。

「凄いな、全部ぴったりだよ」

「ミケちゃんの身体のサイズ、大体分かってるからね」

「何で？」

「一回抱けば、身体のサイズくらい分かるよ」

「——そうなの？」

「他の人は知らないけど、あたしは分かるんだ」

鏡の前にいる魅恵の後ろに立った晶は、魅恵のウエストに手を回した。

「——ミケちゃんのウエストは、六十センチ弱」  
そのまま、手を上に移動させ、胸を揉み始める。

「バストは……八十三のCカップ」

「——晶姉って、鏡の前でHするの、好きなの？」

数時間前、初めて晶に手を出されたのも、鏡の前でだったので、そうなのではないかと、魅恵は思ったのだ。

「鏡に映ってる自分達を見ながら、エッチな事するの、楽しいでしょ？」

ラブホテルなどには、自分達の行為を見ながら楽しむ為に、鏡張りの部屋があるという事は、魅恵も知っている。

「好きな子がエッチな事をされて、悶えてるのを見るの、凄く好きなんだよね、あたし」

「——そうなんだ」

「本当は、自分で相手してると、見るのもするのも中途半端になるから、見て楽しみたい時は、女相手でも大丈夫な女友達とかに、彼女を抱いてもらう事にしてるんだけど……」

（ひよつとして、「自分の彼女を、他の人に……」って、カンナさんが言ってたのって……。彼女を他の人に抱かせて、それを見て楽しむって事なの？）

魅恵はカンナの言っていた事の意味を、理解した。

（カンナさんが、そういう晶姉の趣味を知ってるって事は、ひよつとしたら……）

晶が言う所の、女相手でも大丈夫な女友達の中に、カンナが含まれているのではないかという疑問が、魅恵の頭の中に浮かんで来る。  
「ひよつとしたら晶姉、カンナさんに昔の彼女を？」

「あ、カンナに聞いたの？ カンナにも彼女の相手、頼んだ事あるんだ」

「やっぱり……」

カンナは処女とは言っても、女同士のセックスの経験はあったのだ。女の子とは経験済みだからこそ、「まだ経験無いのよね」の後に、「男とは……」と言葉を付け足していたのだろうと、今になって魅恵は理解する。

もつとも、レズでは無いカンナにとって、女の子同士のセックスの経験は、一種の自慰行為の様なもので、セックスの内には入らないのかも知れないなど、魅恵は思う。

「カナナはレズじゃないから、高校の頃は、頼んでも断られてただけど、大学に入ってから、OKして貰えるようになったんだよね。今は結構、女の子とエッチするの、楽しんでるみたいだよ」（確かに、そうかもしれないな）

カナナの胸から、手を引つ込めた時、カナナが残念そうな表情を浮かべていたのを、魅恵は思い出した。

「ひよつとして……晶姉って、カナナさんともした事あるの？」

「無いけど……ミケちゃんが付き合ってくれなかったら、案外……カナナに相手して貰って、欲望を満たしてたかも」

胸を揉んでいた右手が、下に下がり、ショーツパンツの上から、魅恵の股間を撫で始める。

「ねえ、その内でいいから、女の子の身体のままカナナとHして、あたしに見せてくれない？」

「——駄目」

「何で？」

「晶姉、俺と……ちゃんと付き合おうんだろ？」

「うん」

「だったら、その内……カナナさんにも、俺が男だってばれるよね？」

「まあ、そうだろうね」

「——女だと思ってHした相手が、後で男だって知ったら、傷付くんじゃない？ 晶姉だって、そんな目にあったら嫌だろ？」

「そっか……」

晶は、少し考え込む。魅恵が女の子なら、間違い無く、カナナは喜んで、魅恵の相手をするのだろう。しかし、男だと分かった上で、カナナが魅恵の相手をしてくれるかどうかは、晶にも分からなかった。

「ま、取り敢えず、その事は後で考えるとして……」

キヤミソールの薄い生地の上から、魅恵の胸と股間を愛撫していた晶は、ショーツパンツのボタンに手をかけ、外した。

「——するの？」

後ろを振り返って、魅恵は晶に聞く。

「嫌？」

「嫌じゃないけど……男と女、交互にしようって決めたじゃん！次は、俺が男でする筈だよ！」

「バイトが終わるまで、男に戻れないんだから、仕方が無いじゃない」

そう言いながら、晶は魅恵を本格的に脱がし始め、あっという間に、全裸に剥いた。

「ベッドに寝て」

魅恵は晶に言われた通り、自分のベッドの上に、仰向けに寝転がった。晶は、持って来た服の中に紛れ込ませておいた革製のベルトを手に取り、こっそりベッドの脇に置いたのだが、魅恵は気付かなかった。

晶は、魅恵の上に覆い被さり、唇を重ねる。少し右半身を浮かせ、右手で魅恵の左胸を愛撫し、左手は魅恵の右手を、握りしめている。

魅恵も、左手で晶の右胸の膨らみを、軽く揉み続けている。時折、指先で乳首を弄ったりしながら。

舌と唾液が絡まり合う音と、ベッドが軽く軋む音がする。魅恵への愛撫を始めながら、晶は着衣を脱いでいったので、晶の服は、ベッドの周囲に脱ぎ散らかされている。

「あ……」

唇を離し、魅恵が声を漏らす。腰を浮かせた晶に、右膝を股間に当てて動かされ、魅恵は敏感な部分を刺激されたのだ。

柔らかな毛と、十分に湿った陰唇の感触が、晶の膝に伝わって来る。

「こんなに濡れてる。ミケちゃんって、感じ易い方だね」

膝頭で股間への刺激を続けながら、器用に右足を使って、晶は魅恵の股間を割る。そのまま、身体を下にスライドさせ、濡れている魅恵の股間に、顔を埋める。両手は魅恵の胸に移動し、揉みしだく。

晶は、この体位を好んでいる。胸と股間を同時に責められる、この体位を続けていると、晶自身も感じて、昂ぶってしまう。

自分が責められるよりも、責めたり、自分の好きな女が悶えているのを見て、晶は昂って行くタイプなのである。無論、愛撫される事も嫌いでは無いのだが、好きな女が責められて、感じている姿を晒すだけでも、晶は感じ……濡れてしまうのだ。責めるのが自分であるが、他者であろうが。

そのまま五分程、晶は魅恵を責め続ける。途中、軽くアナルに舌を這わせたりしながらも、念入りに魅恵の股間を責め続けた後、魅恵の膣口の様子を、晶は確認する。

魅恵のモノは口を開け、ひくつき始めているし、粘液を溢れ出させている。息遣いも、かなり荒くなっている。

「うつ伏せになって」

既に、程良い快感を味わい続けている魅恵は、更なる快感を期待し、素直に晶の言うがままになる。ベッドの上を転がって、魅恵はうつ伏せの姿勢をとる。

うつ伏せになった魅恵の背中を舐めながら、手を魅恵の身体の下に滑り込ませ、晶は胸と股間への愛撫を続ける。

「気持ちいい？」

「——うん」

「イキそう？」

魅恵が素直に頷いたのを確認すると、晶は両手を魅恵の身体から離し、全身を魅恵の身体に擦り付ける。自分の身体で、魅恵の身体を洗うかの様に。

魅恵は、背中に擦り付けられる晶の胸の感触と、濡れた股間が太股に擦り付けられる感触に、背筋を震わせる。

（そろそろ……始めようかな）

晶は、ベッドの脇に置いておいたベルトを手に取り、さり気なく魅恵の両手を後ろ手に回す。そして、身体を擦り付けるのを中断して上半身を起こし、あつという間に魅恵の両手を、ベルトで後ろ手に縛った。

突然、両手の自由を奪われた魅恵は、驚きの声を上げた。

「晶姉？ 何を……」

魅恵は振り返って、不安半分、期待半分といった感じの目で、晶を見る。晶は答えず、魅恵の股間に右手を伸ばす。

頭を出しているクリトリスに、中指で振動を加えつつ、口を開き始めた陰唇の中に、人差し指をゆっくりと沈めて行く。弛んでいるとはいえ、完全な処女である魅恵の中は、かなりの抵抗感がある。

「あ、あ……あきら……ん……」

すでに、十分に昂っている上に、クリトリスを刺激されたまま、膣の中に指を沈められた魅恵の息が、急激に荒くなる。

「ふあ……あああ！」

声を上げ、背筋を反らせて痙攣する魅恵を見て、晶は魅恵が絶頂を迎えた事を知る。晶は人差し指を抜き、中指と薬指と揃えて三本指にし、魅恵の膣口に当てた。

「ミケちゃんの処女っていうか……処女膜、貰うよ」  
「ふえ？」

快感の絶頂の中にいる魅恵には、晶の言葉を聴き取るだけの余裕が無かった。魅恵は意味不明な言葉で、問いかけるかの様な反応をするだけである。

処女を貰うという宣言を、魅恵が理解していない事を察しながら、晶は構わず行為を続ける。力を込めて硬直させた三本の指を、晶は魅恵の膣口の中に、ゆっくりと沈め始める。

粘液で通りが良くなっているとはいえ、処女の魅恵の中は、かなり抵抗感があり、処女膜と思われる堰に、指が押しとどめられる。その抵抗が、晶には嬉しい。

自分の彼女が、他の人に抱かれているのを見るのが好きな、かなり変わった性癖の持ち主の晶であっても、彼女の初めての相手だけは、誰にも譲る気はしない。今まで付き合った相手で、晶が処女を貰っていないのは、一人だけである。

もつとも、男との経験が無い限り、処女として扱うのが一般的なので、晶の場合、あくまで初めてのセックスの相手になり、破瓜させる事を、処女を貰うと認識し、表現しているのだが。

魅恵の場合も、晶は破瓜させる事が出来るだけで、本当の意味での処女を、貰う事は出来ない。本当の意味で、魅恵が処女で無くなったら、両性具有者になってしまうらしいと言った、魅恵の話、晶は思い出す。

（一度、そんな身体になったミケちゃんを、見てみたいな……）

そんな願望を心の中で呟きながら、晶は魅恵の横顔を見る。肌を紅潮させて、荒く息を刻んでいる、絶頂の入り口に入ったばかりであるう、魅恵の横顔を。

快感で相殺されるとはいえ、破瓜の痛みは相当なものである。晶自身、絶頂を迎えている時に、昔の彼女の指によって破瓜させられたのだが、相当な痛みを感じた事を、覚えている。

膣の中の堰の感触を、十分に楽しんだ晶は、意を決して、束ねた指を、更に奥に押し込んだ。硬い粘土を指先で貫くような感触が、脳に伝わって来る。今、魅恵を破瓜させているのだという喜びに、心が満たされ、晶は性的にも昂っていく。

逆に、快感に満たされていた魅恵は、破瓜の激痛に混乱し、身体を揺さぶって、晶から逃れようとする。無論、魅恵の両手は縛られ

ている上、魅恵より大きくて、力が強い晶に、身体を抑えられているのだ。逃げられる筈が無い。

「あ……あきらねえ……い、痛い！　痛いよ！」

魅恵は堪らず、悲痛な声を上げるが、晶は構わず指を押し込み、長い指を根元まで完全に、魅恵の中に埋める。粘液よりも暖かい液体が、膣の中から染み出て来る感触を感じ、晶は魅恵の股間に、目を移す。

股間からは、破瓜の証が流れ出していた。ベッドのシーツの染みにするのは勿体無いなと思い、晶は少し体勢を変えて、魅恵の股間に口を持って行き、粘液の混ざった血を、美味しそうに舐め始めた。舐めながら、晶は空いた方の手で、自分のクリトリスを弄り始めた。精神的な昂りで、すでに十分に性感が高まっていた晶は、簡単に絶頂を迎えてしまう。

晶は魅恵の中の指を、激しく動かし始めた。魅恵は、快感と痛みという、異なる感覚に翻弄され、暫くの間、激しく身体を震わせ、痙攣させていたが、数分後……意識を失った。魅恵はうつ伏せのまま、何の反応も示さなくなる。

魅恵が気を失った事に気付いた晶は、少しやりすぎたかなと思いつつ、自分への愛撫を止め、魅恵の膣から指を抜いた。魅恵の手を縛るベルトを解き、うつ伏せのまま、気を失っている魅恵をひっくり返して、仰向けにする。

血の付いた指をしゃぶりながら、魅恵の全身を眺めた後、晶は魅恵の上に覆い被さった。そのまま、気を失ったままの魅恵の唇を、破瓜の血で濡れた唇で存分に味わった後、晶は魅恵の隣で横になる。

魅恵の横顔を眺めながら、晶は満足そうに、眠りの世界に落ちて行った。

「晩御飯、好きな物奢ってあげるから、許してよ……」

ベッドの上で、うずくまっている魅恵の、髪の毛を弄りながら、隣に寝転がっている晶は、甘えるように許しを請っていた。

「俺の処女膜の価値って、晩御飯と同じなのか……」

まだ、破瓜の痛みが後を引いているせいで、魅恵の気分と機嫌は、最悪だった。

「謝ってるんだから、ひねくれるの止めてよ」

「——だって、今度は俺が男になってする筈だったのに、晶姉ばっ



味合いでなら、晶姉って処女な訳だし」

そう自分に言い聞かせた魅恵は、一応……念の為に、晶に確認してみる。気まずそうに、視線を不自然に逸らしながら。

「晶姉って、その……男相手の経験が無いって意味の処女だと、処女……なんだよね？」

魅恵の問いに、晶は頷く。

「あの子にされたせいで、処女膜は無いんだけど、男相手の経験が無いって意味なら、処女だよ」

過去の交際相手とのセックスで、相手の指や疑似ペニスにより、晶は幾度と無く膣を貫かれている。だが、男相手のセックスの経験が無いという意味では、晶は確かに処女である。

「じゃあ、俺が男に戻ったら、晶姉の本当の意味での処女、俺が貰うからね、絶対に……約束だよ！」

「約束するよ、あたしの本当の意味での処女、ミケちゃんが男に戻り次第、あげるって」

晶の言葉を聞いて、魅恵は嬉しそうに微笑む。

「やっぱり、ミケちゃんも処女の方がいいの？」

微笑んだ魅恵を見て、そう思ったのだろう。晶は魅恵に尋ねる。

「それは……まあ、正直言えば、嬉しいけど。でも、本当に晶姉って、男相手の経験無いの？」

「無いよ。男とはセックスどころか、キスも経験無いし……」

「——俺、男だけ……」

「あ、ご免。ミケちゃん以外とは経験無いに、訂正！」

そう言うと、晶は笑い出した。気まずさを誤魔化す様に、魅恵を抱き締めながら。

自分が晶に男として認識されていない様な気がして、魅恵は少しだけ、嫌な気分になった。

翌朝、痛みは完全に消えていた。痛みが残っていたら、バイトに支障をきたすかもしれないと、心配していたので、魅恵は安堵する。

朝食を終えてシャワーを浴び、バイトに行く準備を整えていた、午前八時五十分頃、魅恵は晶からの電話を受けた。魅恵の痛みが引いたかどうか、心配しての電話である。

大丈夫だと魅恵が言うと、晶も安心したようだった。晶が心配してくれていた事が、素直に嬉しかったのだが、バイトに行く時間が

来たので、他の話題には移らず、魅恵は電話を切った。

午前九時十分、魅恵は破魔崎駅のホームにいた。坂崎駅までは坂崎線で二十分、ハーベストまでは、駅から五分もかからないので、時間的には余裕である。初日なので、念の為に、少し早めに家を出たのだ。

服装は、ジーンズにダンガリーシャツ、スニーカーという、殆ど普段通りの格好である。ブラウスやパンプスなどは、背負ったりリュック型のバッグの中に、入っているのだ。

元々、目立つ顔立ちをしている上に、周りは、スーツ姿のサラリーマンが殆どなので、カジジュアルな格好の魅恵は、異常に目立つ。不思議と、周りに女性の姿は無い。

電車がホームに停車したので、魅恵は乗車する。通勤ラッシュの時間は、過ぎているのだが、車内は割と混んでいた。魅恵はドアの端をキープし、取っ手に掴まった。

そのまま、自動ドアが閉まり、電車は走り出した。魅恵は、窓の外景色を眺め、時間を潰す事にした。

次の駅で、客が大量に乗り込んで来て、電車の中は、一気に満員になった。魅恵はドアに身体を押し付けられ、身動きが取れなくなる。

坂崎駅は終点なので、身動きが取れなくても、降り損う事は無いのだが、魅恵が押し付けられている方のドアは、終点まで開かない。終点まで、この苦しい状態が続くのかと思うと、魅恵は憂鬱になる。魅恵の身動きが取れなくなって、二分程が過ぎた頃、魅恵を、更に憂鬱にさせる事態が起った。魅恵の尻を、誰かが撫で回し始めたのだ。

(ち……痴漢！)

尻を撫で回す誰かの手を掴み、警察に突き出すか、自力でぶっ飛ばすかしようと、決意を固める直前、魅恵の頭の中に、妖シ屋の女主人の言葉が蘇って来る。

「三つ目は……女になってる時は、警察沙汰になるような真似をしない事。警察が動いて、うちの店が調べられるようになったら、困るから」

(そうだ、痴漢を警察に突き出しても、ぶっ飛ばしても、警察沙汰

になっちゃう……)

女の身体になつてゐる時は、警察沙汰になる様な真似は、避けなければならぬ事を、魅恵は思い出したのだ。

(それに、考えてみれば、警察に訴えたり、被害届を出したりしようにも、身体の性別が変わってしまったら今の俺には、無理かもしれない……。下手したら俺の方が、警察に怪しまれる事になるかもしれないな)

そんな不安が頭を過り、魅恵は警察沙汰になる程の騒ぎを避ける為、自分の尻を撫でていた誰かの手を払い除け、自分の身体から離れただけで、大きな騒ぎになるような真似は、しない事にした。

(これで、痴漢が収まればいいんだけど……)

そんな魅恵の期待は、裏切られた。痴漢は魅恵の事を、手をどけるだけで、触っても騒ぎ立てない女の子だと、認識したようなのだ。再び尻を触り始めた手を、魅恵は迷わず、手で払い除ける。その後、尻に伸びて来た誰かの手を、魅恵が払い除けるといふ流れは、三回繰り返されて終わる。

終わったのは、痴漢が触るのを、諦めたからでは無い。魅恵の身体を触りに来る手が、突然、四本に増えたからである。

痴漢の手を払い除けていた魅恵の両手は、後ろに回したまま、痴漢の二本の手で、がっしりと掴まれた。魅恵は身体を電車のドアに押し付けられたまま、両手を後ろ手で拘束されてしまったのだ。

身動きも取れず、手も自由に動かせなくなった魅恵の身体を、魅恵の手を拘束していない二本の手が、這い回り始めた。痴漢は二人いて、各々が片手で魅恵の手を掴み、もう片方の手で、魅恵の身体を撫で回している。

魅恵は元々、女の子みみたいな外見をしている為、男の身体の時も、結構痴漢にあつていた。そういった場合、即座に痴漢を警察に突き出すか、駅のホームで半殺しの目に遭わせるかの二択だったので、軽く触られる以上の被害に、魅恵は遭った事が無かったのだ。

(俺、このまま、男に痴漢され続けるの?)

魅恵の全身に、悪寒が走った。

(冗談じゃ無い! 逃げないと……)

ハリウッド映画で、警官に手錠をかけられる直前の犯人のように、背中両腕を固められた魅恵は、身体をよじって痴漢から逃れようとする。しかし、二人の痴漢に後ろから、身体を使って押さえ込ま

れ、電車のドアに身体を押し付けられているので、魅恵は身動きが出来ない。

丁度、二人は魅恵を囲む位置にいたので、電車の他の客からは、魅恵の姿は、見えなくなっている。魅恵が抵抗出来ず、周りからも行為が見えなくなっている事を確信した痴漢達は、遠慮無く魅恵の身体を、触っている。

右後ろにいる男が、魅恵の下半身を触り、左後ろにいる男が、魅恵が身をよじった際、ドアと魅恵の間に来た隙間から手を差し入れ、左胸を触っている。

最初は、尻を撫で回し、割れ目に指を這わせていた手が、次第に下に下がり、太股の間に、指を滑り込ませようとする。魅恵は足を閉じて、侵入させまいとするが、弾力のある太股の肉は、滑り込んで来る指を、迎え入れてしまう。男は手に力を入れ、魅恵の股を割つて、手を完全に、魅恵の股間に差し入れる事に、成功する。

少しの間、太股をさすっていた手は、股間に狙いを変え、デニムの生地と下着越しに、魅恵の陰部の下の辺りを、撫で始める。

無論、その間にも、左胸は揉まれ続けている。揉みながら、シャツの生地越しに、乳首を探り当て、指で摘んで刺激を加える。

(き、気色悪う……)

魅恵は、下半身と胸に加えられる刺激が気持ち悪くて、吐きそうになる。男に触られるだけでも気持ち悪いが、見知らぬ他人に触られるのだから、気持ち悪い上に不安でもあるのだ。

再度、身体に力を入れ、逃れようとしてみるが、身体も腕も、男達に押さえ付けられているので、魅恵は逃れられない。それどころか、逃げようと身体を捻ったせいで、ドアとの間に隙間が出来てしまい、左胸を触っていた、左後ろの痴漢の左手が、自由に移動出来るようになってしまった。

魅恵は身体をドアに押し付け、隙間を無くそうとするが、腕を後ろに引っ張られてしまい、隙間を無くす事が出来ない。左後ろの痴漢は隙間を利用して、より大胆に、魅恵の身体を触り始めた。

まず、ダンガリーシャツのボタンを外して、手をシャツの中に、忍び込ませる。そのまま、スポーツタイプのブラの上から、痴漢は左胸を揉み始める。

比較的生地の厚い、ダンガリーシャツの上から触られた時よりも、愛撫の感覚が、はっきりと魅恵に伝わって来る。不快さと、それ以

外の微妙な感覚が混ざり合った、感覚が。

そのまま十回程、左胸を揉み続けた後、痴漢はブラの下の方を掴み、たくし上げる。ブラは魅恵の両胸の上に、乗る様な形になる。

痴漢の手が、左胸を直に触り始める。少し硬めだが、程良い大きさの魅恵の乳房を揉んだり、乳首を指で挟んだり、細かく振動させて刺激したりと、好きな様に弄び始める。

直に触られたせいで、愛撫の刺激は魅恵の脳に、より明確に伝わり始めた為、魅恵の本能は、意志とは逆の生理的な反応を、身体に返す。乳首が起ち、硬くなっていくのが、魅恵自身にも分かる。

(何で……起っちゃうんだよ?)

魅恵は自分の身体の反応が、恨めしかった。男の身体の時にも、別にエッチな事を考えている訳でも無いのに、無意味に股間が起ってしまう事があった。女の身体も、意志とは無関係に、反応してしまふもののかなと、魅恵は思う。

右後ろの痴漢も、魅恵とドアの間に、隙間が出来た事に気付いたのか、太股の間から手を引き抜き、魅恵の左側から、前に手を回して、魅恵の股間を触り始める。

太股の間から、手を差し込んでいた時は、陰部の下の辺りまでしか、手が届かなかったようなのだが、今は手が届くので、露骨に魅恵の陰部の上を、触っている。

数秒間、デニムの生地越しに陰部を触っていた痴漢は、ジーンズのファスナーを降ろし始めた。

(そ、それだけは、嫌!)

見知らぬ他人の男に、陰部を触られる事の嫌悪感は、魅恵の耐えられる限界を超えていた。堪え切れずに、魅恵は声を上げそうになってしまい、大きく息を吸い込む。

「間もなく、終点の、坂崎、坂崎、坂崎、坂崎!」

突如、電車が終点の坂崎駅に辿り着く事を、社内アナウンスが伝えた。魅恵の後ろの痴漢達が、軽く舌打ちをして、手を引込める。

魅恵は、痴漢達の手が自分から離れた事に、安堵した。自分が声を上げずに済み、警察沙汰を避けられた事にも。

魅恵は、やっと自由になった両手で、数センチ下げられたファスナーを上げ、ブラとシャツのボタンを、元に戻した。程なく、電車は坂崎駅のホームに滑り込み、魅恵の前のドアが、勢い良く開いた。背後からの強烈な圧力で、魅恵は電車の中から押し出された。ホー

ムに出た魅恵は、即座に後ろを振り向き、痴漢の姿を確認しようとしたが、そこには多数のサラリーマン風の男達がいて、誰が痴漢だったのか、全く分からなかった。

「死ねよ、変態！」

魅恵は、吐き捨てる様に、呟いた。自分が少し汚れた様な、嫌な気分、魅恵は苛まれる。

「まあ、晶は気にしないんだろうけど……」

自分の彼女を、他人に抱かせて楽しむ様な晶の場合、魅恵が痴漢に遭っても、全く気にしないだろう。それどころか、下手すれば喜ぶかもしれないのだ。

もつとも、彼女の晶が平気でも、魅恵が平気な訳では無い。朝っぱらから痴漢に襲われ、魅恵は最低の気分になってしまっていた。

そんな魅恵の周囲に、突如、いい匂いが漂って来る。女性が身に纏う匂い……香水の匂いである。

最初は、いい匂いかなと思ったが、香水の匂いが数種類混じり始めたので、すぐにいい匂いというより、単なる強烈な匂いになってしまった。何だろうと思いつつ、後ろを振り向いた魅恵は、沢山のOL風の女性や、カジュアルな服装の女の子が、歩いている光景を目にする。

「あれ？ 女の人……」

そこで初めて、坂崎線には女性専用車両が三両も用意されていた事を、魅恵は思い出した。ラッシュ時でも、余裕を持って、女性を収容出来るので、殆どの女性客は、女性専用車両に乗るのが、当たり前前だったのである。

「そうだ……俺、女性専用車両に乗れば良かったんだ！」

身体が女性化しているとはいえ、魅恵の中身は男性なのだ。それ故、女性専用車両に乗ろうという考えが思い浮かばず、魅恵は普通車両に乗り込んでしまった。

「次からは、女性専用車両に乗ろう。そうすれば、痴漢なんかには、遭わずに済むし」

ほっとしたように呟きつつ、魅恵は改札の方に向かって、歩き出した。もつとも、女性専用車両に乗れば、痴漢に遭わないという考えが、甘かったという事に、魅恵は後で気付くのだが……。

ハーベストに辿り着いた魅恵は、タイムカードを押して、更衣室

に向かった。途中、白いコック服姿のスマレとすれ違った魅恵は、軽く挨拶を交わす。

「早いじゃない、ミケちゃん」

「取り敢えず初日なんで、家からの時間計ろうと思って……」

「そうなの……。それにしても、随分と男の子っぽい格好ね」

「あははは、女の子っぽい格好、慣れてないんですよ……。俺」

「――俺？」

「あ、いや……。私」

魅恵は慌てて、言い直す。

「ヘアスタイルとか、全体的なイメージは、確かにボーイッシュ系だけど、顔は……。南国系の美少女って感じだから、可愛い系のファッションも似合うと思うよ、ミケちゃん」

「そうかな……」

「とりあえず、うちの店の制服姿、楽しみにしてるわ。やっぱり、可愛い女の子は、可愛い格好しないとね！」

「はあ……」

この店の制服は、スマレがメイド服姿の女の子が好きだから、メイド服になったのだと、カンナが言っていたのを、魅恵は思い出す。

更衣室には、誰もいなかった。調理はスマレが担当し、フロアとレジを、二人のウェイトレスが担当するので、あと一人、ウェイトレスが来る筈である。

五つ並んでいるロッカーの端に、魅恵の名前が書かれたプレートが付いている。魅恵がロッカーを開けると、クリーニングしてある制服のセットが、棚に乗っていた。

制服を手にとった魅恵は、恥ずかしい程に女の子っぽいというか、可愛い制服だな……。と、改めて思う。

（誰か来る前に、着替えた方がいいか……）

魅恵は早速、制服に着替え始める。ダンガリーシャツとジーンズ、それに靴を脱いで、下着姿になる。ロッカーの扉に付いている鏡には、スリムで均整の取れた、スポーツタイプのシンプルな下着姿の、可愛い女の子が映っていた。

「結構、可愛いな……」

自分の下着姿に対する率直な感想を、魅恵が呟いた直後、更衣室にカンナが入って来た。

「ミケちゃん、もう来てたんだ！」

突然のカンナの出現に驚きつつ、自分の下着姿に羞恥心を覚えた魅恵は、ブラウスを取り出そうとしていたバッグで、慌てて身体を隠す。

「あ、お早うございます！」

「——ミケちゃん、女の子同士なんだから、恥ずかしがる事も、隠す事も無いと思うけど……」

魅恵の行動や表情から、魅恵の心理状態を察したカンナは、そう言いながら苦笑する。

「いや、その……隠してたんじゃないくて、バッグからブラウスとオーバーニーソックスと靴、取り出そうと思っただけで……」

「そうなの？ 身体、隠した様に見えたんだけど」

「そんな訳無いじゃないですか、気のせいですよ！」

魅恵は自分の言葉通り、バッグの中から、ブラウスなどを取り出した。そして身体を隠す為に、魅恵は急いでブラウスを羽織る。

靴下を脱いで、紺色のオーバーニーソックスに履き替え、同じく紺色のワンピースを、穿く様に着る。下着姿よりはましだとはいえ、スカート姿というのは下半身が心許ないなど、魅恵は思う。

「サッシュ以外の小物は、エプロン着る前に身に着けた方が、楽だよ」

「あ、はい」

カンナに言われた通り、クロスタイやカフス、カチューシャなどを身に着けた後、フリルだらけのエプロンを、魅恵は装着する。

「着替え終わった？」

「はい」

「ちよつと見せて」

魅恵はメイド服姿を見せる為に、カンナの方を振り向いた。

「！」

驚きの余り、思わず魅恵は息を飲む。下着姿のカンナが、いきなり魅恵の視界に、飛び込んで来たからである。

カンナは先程の魅恵同様、下着姿になっていたのだ。シンプルな下着の魅恵や晶と違い、少し装飾が派手な白い下着を、カンナは身に着けていた。

魅恵や晶と違うのは、下着のタイプだけでは無い。下着の中の身体……特に胸が、根本的に違っていた。カンナの胸は、グラビアア

イドルクラスの、見事な胸なのだ。

その、大きな胸を揺らしながら、カンナが自分の方に迫って来たので、魅恵は狼狽える。

「カチューシャが曲がってるよ、直してあげる」

魅恵の目の前まで来たカンナは、手を伸ばし、魅恵の頭の上のカチューシャを直した。カンナの胸が、魅恵の胸に触れる。魅恵は、目のやり場に困る。

カンナは、魅恵の顔が紅潮し、不自然に胸から目を逸らしている事に気付く。

「そっか……ミケちゃんレズだから、おっぱいとか見ると、照れちゃうんだ」

自分がカンナの胸を見て、照れているのを言い当てられ、魅恵はリアクションに困る。

「晶に、変わった趣味の事、聞いた？」

「――一応」

「だったら、ミケちゃんが他の女の子とエッチな事しても、別に怒ったりしないどころか、晶は喜ぶって、知ってる訳ね？」

魅恵は、頷いた。

「だったら……いいよね」

「え？」

カンナは、魅恵の顎に手を添えて、少し上に傾けると、魅恵にキスした。唇を被せる程度の、軽いキスを。

魅恵は狼狽しつつも、カンナの身体を押して遠ざけ、唇を離れた。

「カンナさん、駄目です！」

「何で？ 私ってミケちゃんから見ても、魅力無いかな？」

キスを拒絶されたカンナは、ちよっと不満そうに、魅恵を問い詰めた。

「そんな事無いですけど……」

「じゃあ、いいじゃない？ 晶だって、喜ぶんだから」

「それは、あの……後でカンナさんが、後悔する事になるから……」  
後で自分が男だと知ったら、女だと思っ込んでいたカンナが、傷付く事になると思っただので、魅恵はカンナの誘いを、断り続ける。

「何で？ 別に後悔なんてしないよ。晶の彼女とエッチするのなんて、珍しくも無いんだし」

普通の人が聞いたら驚く様な事を、カンナは平然と言い切る。

「——それに、もうすぐ仕事だから。カンナさん、まだ着替えて無  
いし」

「大丈夫よ、あと十五分ちよつとあるし、着替えるの、五分もかか  
らないから」

「でも……」

「何も、最後までしようっていう訳じゃなくて、キスして、身体を  
ちよつとだけ……ね」

カンナは魅恵の身体を抱き寄せ、少し強引に唇を合わせた。そし  
て、唇を離すと、ブラを上にならずらして、大きくて形も良い胸を、露  
出させる。

そのまま、右の乳房に魅恵の口元が来るように、カンナは魅恵の  
頭を抱き寄せた。晶のモノよりも、段違いに大きいカンナの胸に、  
目を奪われた魅恵は、カンナのなすがままに、ボリユームのある右  
胸に顔を埋める。

「吸って……」

（いいのかなあ？）

少しだけ罪悪感を感じたものの、魅惑的なカンナの胸に、顔を埋  
めてしまった魅恵は、カンナの乳首に口を付けてしまう。そのまま、  
軽く何度か舌で舐め、口の中で転がした後、魅恵、乳首を、強く吸  
いはじめる。

カンナは軽く呻きつつ、魅恵の右手を左乳房に誘う。愛撫を催促  
するかの様に、豊かな乳房に魅恵の掌を押し付ける。

魅恵は右手で、カンナの左胸への愛撫を始める。

（晶のより、柔らかいな……）

胸が柔らかくて大きいという事は、単に脂肪分が多いというだけ  
なのだが、男の魅恵にとって、やはり大きくて柔らかい胸というも  
のは、それだけで魅力的な存在なのだ。魅恵は次第に、カンナの胸  
への愛撫に、のめり込んで行く。

右胸の乳首から唇を離し、胸の谷間を舌で舐めながら唇を左胸に  
移動させる。そのまま、乳首ごと胸の先端を口に含み、口の中で舐  
め回す。

左手は、右胸を揉み始める。重みがあり、手に余る大きさの胸を、  
力の加減を微妙に変えながら、揉み続ける。乳首を指で挟んだり、  
捻ったりする。

カンナの息が、次第に荒くなって来たので、魅恵はカンナの顔を

見上げて、様子を確認する。顔を上気させたカンナと目が合い、魅恵は少し、気まづい思いをする。

「ミケちゃん上手い……これ以上続けると、最後までしたくなっちゃいそうだから、この辺でいいよ」

魅恵は頷いた。少し、残念なような気がしたが、これ以上の事は、しない方がいいなと思ひ、カンナの胸から、顔と手を離れた。

「まだ十分はあるね。今度は、私がしてあげる」

壁の時計で時間を確認してから、カンナは言った。

「え、いいですよ、俺は……」

「俺って……ミケちゃんってホントに、男の子みたいね」

少し笑いながら、カンナは魅恵の身体を半回転させ、後ろから抱き締めた。そのまま、右手をエプロンとワンピースの間に、潜り込ませる。ボタンを簡単に外して、ワンピースの中に手を入れたカンナは、ブラをずらして、直に魅恵の左胸を、愛撫し始める。

「ん……まだ、ちよつと硬いかな？」

魅恵の胸の感触を口にしつつ、ワンピースの裾を捲り上げたカンナの左手は、魅恵の下腹部を軽く撫でた後、あつという間にシヨーツの中に、潜り込んで来た。かなり、慣れた感じだなど、魅恵が感じる程に、カンナは手際が良い。

「うちの制服、ストッキングじゃないから、こういう事がしやすいのよね」

カンナは楽しそうに言った。

「カンナさん……こんな事……駄目っ！」

魅恵の抗議を無視して、カンナは愛撫を楽しみ続ける。右手は魅恵のワンピースの胸を開き、左だけで無く、左右の胸を揉み、乳首を指先で弄ぶ。

左手の指先は、シヨーツの中で秘裂を割り、内壁を撫でる。クリトリスの皮を剥き、優しく刺激する。

愛撫を受けた魅恵は、顔を上気させ、軽く喘ぎ始めている。

「そうやって感じてる時の顔は、ちゃんと女の子だよ。喋り方とか、男の子っぽいけど……」

「え？」

「——私はレズじゃないから、女の子っぽい子よりも、ミケちゃんみたいにボーイッシュな子の方が、好みなんだ……」

もう少しで、魅恵は絶頂を迎えそうだったのだが、自分を女の子

だと思いついでるカンナに、自分を愛撫させている罪悪感が、次第に強くなってきてしまった。カンナとの行為を打ち切ろうと、魅恵は決意する。

「カンナさん……もうそろそろ、着替えないと」

「——そうだね」

カンナは、まだ下着姿だった。開始時間まで五分を切ったので、流石に着替えないとまずいなと思つたカンナは、魅恵を手放した。

魅恵を自分の方に向かせて、軽く抱き締め、カンナは魅恵と唇を重ねる。舌を入れない、軽いキスである。

「続きは、また今度ね……」

カンナの言葉に、魅恵は思わず、頷いてしまう。しまったと思いつつながら、魅恵は服の乱れを直し始める。

慣れているのだろう、カンナは魅恵の傍らで素早く制服を着終えて、あつという間にメイド服姿になる。

「さーて……お仕事、お仕事！」

そう言いながら、元気良く更衣室を後にして、フロアの方に向かうカンナの後を、魅恵はついて行く。

ウェイトレスの仕事は、オーダーなどの作業が電子化されているとはいえ、ハードなものだった。午前十時の開店から、その日の食材が切れるまでという、少し変則的な営業形態をとっているハーベスタは、遅くとも午後八時過ぎには閉店するペースで、客が途切れずに訪れる人気店なのである。休憩時間以外は、殆ど身体を休める暇が無い。

女物の服を着たまま、人前で働く事には、魅恵はすぐに慣れてしまった。正確には、女物を着ている事を恥ずかしがる程の余裕が、無かつたというべきだろうか。

それ程に、ハーベスタは流行っていて、仕事が忙しかったのである。

「ハードでしょう？　うちのママ、料理だけは上手いから、お客さん多いんだ。ミケちゃんが来てくれなかったら、私……死んでたかも」

休憩時間中に、カンナが笑いながら言った。

「普段は水曜が定休日なんだけど、駅前通りの商店会の取り決めで、春休み期間中は休みが無いんだ。私は何日か休めるけど、ミケちゃ

んは四月五日まで、毎日だよね、大丈夫？」

「——何とか」

「頑張ってるね。まあ、うちのバイトが合ってる様なら、新学期からも続けて欲しいくらいなんだけど」

「学校があるから、無理ですよ。新学期が始まったら、色々忙しくなるだろうし」

「そっか、ミケちゃん高校生だもんね……女子高？」

「共学ですけど……何で？」

「いや……レズの子って、女子高行く子が多いっていうから」

「そういえば、晶も女子高だったなど、魅恵は思う。」

「ミケちゃんくらい可愛かったら、男の子にも、もてるんだろうねー」

「そんな……全然、もてませんよ」

本当は、魅恵は女の子からは告白された事は、余り無いのだが、男子生徒からは、何度も口説かれた事があったのだ。魅恵を女の子だと間違えて口説いた者もいれば、男の子だと分かって口説いた者もいた。無論、全部断ったが。

「そうなの？」

「俺……じゃなくって、私はともかく、カンナさんみたいに魅力的な人が、うちの学校通ってたら、男子にもてたと思いますよ」

男の子にもてないというのは、嘘だが、カンナが魅力的だというのは、本音である。

「ミケちゃん、結構、口が上手いね。そうやって女の子誉めて、モノにしちやったり、してるんだ」

「してませんよ！ 俺……じゃなくって」

「一人称、無理して私にしなくてもいいよ、ミケちゃんが自分の事、俺っていうの、似合ってるから……。お客さんの前とかでは、困るけどね」

魅恵は、頷く。

「俺……恋人とか出来たの、晶姉が初めてなんです」

「——まあ、女の子同士の人は、相手探すの、普通の人より難しいだろうからね。普通の人の上、相手がいた事無い私が言うの、変かもしれないけど……」

カンナは、魅恵を見詰める。

「ミケちゃんが、ボーイッシュな女の子じゃなくって、女の子みた

いに可愛い男の子だったら、良かったのにな……。そしたら、彼氏になって貰うのに」

「え？」

「冗談よ。ミケちゃん女の子だもんね。さつき確認済みだし」

「からかうの止めて下さいよ、カンナさん」

男の子だったら良かったと言われて、少し魅恵は、気分が良かった。

「ま、彼氏にはなつて貰えないけど、その内、ちゃんと相手してね。晶に見せながらでもいいし、晶抜きでもいいから」

「そ、それは……」

「二十年間、恋人無しのお姉さんを、慰めると思つて、相手してよ。それに……」

「それに？」

「晶の彼女になつた以上、私に抱かれるのは、義務みたいなもの。レズでも無い私が、女同士のセックスの気持良さ知っちゃつたの、晶のせいなんだから」

「義務……ですか？」

「冗談。本当に嫌なら、無理にとは言わないわよ。だけど、断る時は、上手く断つてね、これでも結構、傷付き易い方なんだから」

カンナは、冗談めかして言った。

「男に相手にされない上に、レズの女の子にまで相手にされないなんて事になったら、自信が無くなっちゃうもんね……」

断るのも傷つけるし、断らないのも傷つける事になるなら、自分は一体、どうすればいいんだろうと、魅恵は思う。

「バイト、どうだった？」

魅恵が家に帰るなり、コロッケとポテトサラダを手土産に、家を訪れた晶が、聞いた。

「疲れた、結構ハードだよ。あの店、かなり流行ってるんだね」

晶は、ダイニングキッチンテーブルに並べた皿の上に、持って来たコロッケとサラダを、並べ始める。

「カンナの母さん、料理上手いからね」

「晶と違ってね」

「——あたしだって、練習すれば、出来るってば！」

インスタントのカレーが、まともに作れない程に、晶は料理下手

なのだ。今日も、魅恵の為に夕食を用意して、土産として持って来てくれたのだが、全て、スーパーの惣菜売り場で買って来たものである。

「そういうえば、カンナとBまでしたんだって？」

「え？」

魅恵は驚きの声を上げ、視線を不自然に泳がせる。

「さつき、カンナに電話で聞いたんだ。バイト前にミケちゃんのこと、ちよっと試してみたら、上手かったから、今度貸してって言ったよ」

「あの、それは……」

「——女だと思ってHした相手が、後で男だって知ったら、カンナ、傷付いちやうかもな……」

女だと思ってHした相手が、後で男だと知ったら、傷付くかも知れないと思ひ、カンナとはHはしないと云った自分が、軽くではあつても、カンナとしてしまった事を指摘され、魅恵は返す言葉が無かつた。

「誘つたのはカンナなんだろうけど、何で断らなかつたの？」

「それは……その……カンナさんの胸見たら……抑えがきかなくなつて……」

「確かに……友達だとは分かっているながら、カンナの胸は、あたしもたまーに抑えが効かなくなつて、触っちゃう事はあるからね」

晶は、納得したように頷いた。

「これからは、気を付ける！」

カンナの誘惑に負けない事を、魅恵は改めて決意した。

「そうだね、あたしもミケちゃんに手を出すのは、バイト期間が終わつてからにしてつて、カンナに言つておくよ。バイトが終われば、ミケちゃんが男だつてばらしても平気だし、その上で、カンナがミケちゃんをどうするかは、カンナが決めればいい事だから……」

魅恵は、こくりと頷いた。

「案外、男の子に戻つたミケちゃんの方が、女の子のミケちゃんより良いつていうかもね。考えてみれば、カンナは一応、ノーマルなんだから……」

晶の言葉に、魅恵はカンナの豊かな身体を、男として抱く光景を、想像してしまふ。そんな想像をしている事を、晶は察したのか、軽く釘を刺す。

「——ミケちゃんが、男に戻ってカンナを抱くのは……あたしも見てみたいから、別に構わないんだけど、カンナの前に、あたしを抱いてよね……彼女なんだから」

「あ、うん。それは勿論」

魅恵は素直に、頷いた。

（カンナの前に、あたしを抱いてよね……か。まさか、あたしが男に抱いてって言うなんて……）

目の前で、夕食を食べている魅恵を見ながら、晶は思う。意外だなという感慨を、抱きながら。

女の恋人の場合、初めての相手は、他の相手には譲らないというのが、晶の信条である。晶は所謂、初物好きという奴なのだ。相手が親友のカンナとはいえ、魅恵の男としての初めての相手を、初物好きの晶は、譲る気にはなれなかった。

初めて男の身体を、自分から抱きたいと思った事に、晶は少し驚いた。無論、それは性的な要求というより、恋人として認識した相手に、自分の事を、深く刻み付けたいという、一種の独占欲的な要求なのだが。

魅恵に対して、初物好きとしての性質が発現している事自体にも、晶は少し安心していった。心のどこかで、男である魅恵の事を、恋人だと思えないかも知れないという不安を、晶は本音では感じていたのだ。

初めての相手になりたいという感情は、晶の場合、恋愛対象の相手以外に、感じない。何故なら、晶の初物好きの性質は、過去の恋愛絡みのトラウマを原因としているからである。

つまり、男としての魅恵の、初めての女になりたいと思っている事自体が、魅恵を恋愛対象……恋人だと思っっているという事を意味しているのだ、晶にとっては。

「ミケちゃんは、あたしの恋人なんだね……」

「——何だよ、改まって？」

「ん……何となく、そう思っただけ」

「変なの」

「これからは、ちゃんと料理の練習とか、しようかな……。結婚とかしたら、子供とか出来る訳だし、ちゃんと料理とか出来た方が良いもんね……」

「——本気？」

魅恵の問いに、晶は頷いてみせる。

「今まで……結婚するとか、子供が出来るとか、考えた事が無かったから、料理なんて出来なくてもいいって思ってたんだけど、ミケちゃんのせいで、状況が変わっちゃったから」

晶は、魅恵を抱き締める、

「嬉しいな……あたしも、母親になれるんだ」

「晶姉……」

「あ、エッチする時は、ちゃんと半分、女になってくれなきゃ、駄目だからね」

「……分かってるよ」

魅恵は、少し複雑そうな笑みを浮かべて、食事を続けた。

ハーベストでのバイトも一週間が過ぎ、八日目に入った。元々器用な魅恵は、既にバイトにも慣れ、ウエイトレスもレジも、ほぼ完璧にこなしていた。

時々、カンナに更衣室で迫られるのだが、更衣室という場所柄、軽く身体を触り合う程度の行為より、先に進む事も無かった。女性専用車両を使うようにしてからは、痴漢とも無縁であり、魅恵のバイト生活は、順調そのものだったのだ。

唯一の困り事と言えば、男性客からのナンパである。しつこく携帯電話の番号を聞き出そうとする客や、自分の携帯番号を書いたメモを手渡して来る客、バイトを終えた魅恵を、店外で待ち伏せする客など、一日平均三人程の男性客が、魅恵に何等かのアプローチをしてくるのだ。無論、全て魅恵は断るのだが。

カンナや他のバイトの娘も、かなりルックスのレベルが高いので、魅恵同様のアプローチを男性客から受けるらしいのだが、皆、当たり前前の様に断っていた。

「男との出会い、あるじゃないですか？」

八日目の勤務時間が終わった後の更衣室で、男と出会う機会が無いと嘆いていたカンナに、魅恵は訊ねてみた。

「ナンパしてくるような軽い男は、パス。それに、仕事中の女を口説くような男なんて、働く女を軽く見るとしか思えないよ」

当たり前前だと言わんばかりの口調で、カンナは答えた。

「私も仕事中には、ミケちゃんの事、口説かないでしょう？」

カンナは笑いながら、そう付け足した。確かに、カンナが魅恵に迫って来るのは、仕事の前後や休憩時間だけだった。

「で、今日も口説いてみるけど、これから家に来ない？」

「——遠慮しときます」

晶はカンナに、バイト期間が終わるまで、魅恵には手を出さない様に言ったのだが、効果は無い。

「晶は今、ゼミの合宿に行ってるから、帰っても会えないんでしよう？」

魅恵は頷く。晶は一昨日から一週間、大学のゼミ合宿に行っている。魅恵は暫く、晶と会えないのだ。

「晶がいなくて、欲求不満になってしまいたいそうなの、ミケちゃんの欲望を、優しいお姉さんが満たしてあげようと言ってるのに……つれないなあ……」

「カンナさんはノーマルなんですから、ちゃんと男の相手を探して下さい！」

「——そのつもりなんだけど、一応……。ちゃんとした出会いが無いのよね……」

カンナは少し、悔しそうに言った。

結局、何とかカンナの誘いを振り切って、魅恵は満員の坂崎線に乗った。女性専用車両なので、車内は全て女性である。バイト初日の帰りからは、魅恵は痴漢を避ける為、女性専用車両を使っていた。汗に化粧品、香水などの臭いが混ざり合っているので、車内の臭いは、普通車両よりもきついのだが、臭いには数分で慣れるので、問題は無い。魅恵は降車駅である破魔崎駅まで開かないドアに寄り掛かり、窓の外を眺めて、時間を潰していた。

「暑い……」

満員に近い車内は、汗ばむ程に暑かった。今日は初夏のような陽気だと、今朝の天気予報で言っていたので、魅恵は黒のキャミソールに、ジーンズを足の付け根でカットオフした、デニムのショートパンツという、真夏の様な格好だったのだ。

男物の夏物は、まだ押し入れの中だったのだが、晶に貰った女物の服の中に、涼しそうな夏服があったので、魅恵は初めて女物の服を着て、バイトに行ったのである。キャミソール姿では、普段のスーツタイプのブラだと露出してしまっているので、肩を出す服を着る場

合用にと晶がくれた、チューブタイプのブラを、魅恵は着けていた。  
「クーラーつけて欲しいな……」

「確かに、ちよつと暑すぎるわね……」

魅恵の眩きに、魅恵の前にいる乗客が、同調した。前といっても、魅恵は左側……窓の外を眺めていたので、どんな客だかは、知らなかったのだが。

魅恵は自分の独り言に、誰かが同調した事にも驚いたが、声を発した乗客の姿を見て、更に驚いた。晶より背が高い、百八十センチを越えていそうな長身の上、日本人では無かったのだ。いわゆるアングロサクソン系の外見の、女性だったのである。

「君なんか、まだ楽な方よ。薄着の上、肌だつて出してるんだし」  
女はスーツ姿だった。しかも、ダークな色調の。

「スーツは暑いでしょうね。黒だったら、尚更……」

「暑いよ、胸元とか開ければ、少しは涼しくなるかもしれないんだけど、開けてもいい？」

「——どうぞ、御自由に」

「ありがとう。女性専用車両だと、多少はだらしなない格好しても平気だから、楽よね……」

そう言うと、女はブラウスのボタンを、外し始めた。周りに女しくない気楽さからだろう、女は大胆にブラウスの前を開く。

黒のシンプルなブラに包まれた、胸の谷間が顔を出す。カンナ程では無いが、かなり大きい。

「これで結構、楽になるわ」

自分にも付いているし、晶とカンナにも、頻繁に見せられているので、少しは見慣れたとはいえ、やはり間近に胸の谷間を目にするのは、魅恵には少し恥ずかしい。魅恵は、少し顔を赤らめながら、女の谷間から目を逸らし、話題を変えた。

「——日本語、上手いですね」

「上手いというより……日本語しか喋れないの、あたし」

「日本語しか？」

「親はイギリス人なんだけど、日本に定住してるんで、子供のあたしも日本語で育てられたから、英語は苦手なの」

「見た目からは、想像出来ないな……」

「皆、そう言うよ」

微笑む女の派手な顔立ちを見て、魅恵は誰かに似ているなと思う。

誰に似ているのだろうと、少しの間考え続けた魅恵は、化粧品のカムフラージュに似ているのだと、気付く。

電車が、駅に停車する為に減速する。慣性のせいで、魅恵は進行方向にいた女の方に、倒れ込み、女に抱きとめられる。

女よりも、十五センチ程背が低い魅恵は、女の胸元に、顔を乗せるような体勢になってしまう。

「あ、すいません」

「気にしないで……」

顔を赤らめ、魅恵は女から身体を離そうとするが、女は魅恵を抱きとめたまま、魅恵を離そうとしなかった。そのまま、停車した電車の中に、乗客が乗って来て、満員に近かった車内は満員となり、魅恵は女と身体を密着させ、胸元に顔を寄せたまま、身動きがとれなくなる。

(ん?)

突如、魅恵は左胸を軽く揉まれた。車内は混んでいる為、最初は誰に揉まれたのか分からなかったのだが、程無く、魅恵は自分の胸を誰か揉んだのか、気付く。

揉んだのは、目の前の女の右手だった。女は左腕で魅恵を抱き締めながら、右手で胸や……魅恵の身体を、触り始めたのだ。

「あの……何するんですか?」

顔を赤面させながらも、女を睨んで抗議する魅恵の耳に、女は顔を寄せ、囁いた。

「君、女の方が好きなんでしょう?」

「え?」

「あたしの胸見て、顔を赤くしてたじゃない。あの反応見れば、分かるよ」

女が胸元を開いて見せたのは、魅恵の反応を見て、魅恵が女を性的な対象としているかどうかを、確認する為だったのだ。

「あたしも同類よ、安心して……」

無論、見知らぬ他人に、身体を触られて、安心など出来る訳がなかった。

「痴漢……じゃなくって痴女されて、安心出来る訳、無いじゃないで……ん……」

女は、魅恵の頭を抱え込んで、顔を自分の胸に押し付けて、魅恵の抗議の言葉を、遮る。そのまま身体を捻って、魅恵をドアに押し

し付ける。女の方が、かなり身体が大きいので、魅恵の姿は、殆ど誰にも見えなくなってしまう。

魅恵の身体を奪い、身体を周りから見えない様にした女は、大胆に魅恵に痴漢行為を働き始める。手始めに、魅恵のキャミソールの中に手を侵入させ、ブラのホックを外して、魅恵のブラを抜き取り、ジャケットのポケットに仕舞う。

キャミソールの中に両手を入れ、魅恵の双乳を、握り込む様に揉み始める。微妙な強弱を付け、指先で乳首をこね回す。

多少、強引な愛撫ではあるが、相手が美形の女性のせいかな、不快感よりも快感が勝ち、すぐに魅恵は乳首を立たせてしまう。

(俺、胸が感じやすいのかなあ?)

女とはいえ、見知らぬ他人に胸を愛撫され、しっかりと感じ始めている自分に、魅恵は当惑する。

(晶が毎日、俺を抱くから、感じやすくなってきてるのかも)  
付き合い始めてから毎日、晶は魅恵の家を訪れて、当たり前のように、魅恵を抱いている。未開拓であった女性としての魅恵の身体を、かなり晶は開発してしまっているのだ。

一昨日から晶が合宿に行ってしまったので、この二日間、セックスとは無縁だった魅恵の身体は、愛撫に少し餓えていた様で、女の愛撫に好意的に反応してしまっている。胸を愛撫されただけで、股間が少し、体液を分泌してしまった程に。

女は右手を下に下ろし、ショートパンツのボタンに手をかけ、外した。そのまま、ファスナーを下ろして、中に右手を潜り込ませる。ゆっくりと周りを責めてからなどという、悠長な真似をせず、女は直に谷間に指を這わせ、クリトリスを探し当てる。

一番敏感な部分を指で摘まれた魅恵が、漏らした吐息を耳にして、女は感じているのを察したのだろう。指を震わせ、女は魅恵に刺激を加え続ける。

女の指を外そうと、魅恵は腰を動かすが、女の指は外れない。それどころか、ショートパンツがずり落ちそうになったので、両手で押さえなければならなくなり、両手の自由が無くなってしまふ。

突如、女はクリトリスから指を離し、少し下にある膣口の上を、撫で始める。

「もう濡れてるけど……向き合っただけだと、入れ難いね」  
女は左手をキャミソールの中から引き抜いて、魅恵の身体を、時

計とは逆向きに半回転させ、ドアに押し付けた。背後から魅恵を責められる体勢を、女はとったのだ。

両手でショートパンツを押さえている上に、女に下着の中に右手を入れられたままだったので、魅恵は動き辛い状態だった。その為、殆ど抵抗出来ずに、魅恵は女の為すがままになる。

バイト初日に、二人組の痴漢に襲われた時と、状況は似ている。しかし、女の方が手際が良く、手口が大胆だった。

まだ襲われ始めてから、五分も経っていないのに、既に魅恵は、谷間を直に弄られてしまっている。

「まだ破魔崎駅まで、五分近くあるから、十分に楽しめるね……。君、破魔崎で降りるんでしよう？」

女に耳元で囁かれた魅恵は、自分が降りる駅を、女が知っていた事に驚き、焦る。

「あたしも、破魔崎で降りるんだ」

「何で、俺の降りる駅を？」

「何日か前から、君には目を付けてたの。美味しそうな子がいるなってね。あたしと同類だとは、思わなかったけど……」

同類とは、同じ性的趣向の持ち主だという意味である。

「俺、レズじゃなくって、男なんです！」

「——面白い冗談だけど、男の人のここには、指が入ったりしないんじゃないのかな？」

女は魅恵の膣口の中に、人差し指と中指を沈め始めた。きつい膣口は、指を押し止めようと抵抗するが、女は構わず指の第二関節辺りまで、魅恵の中に突き立てた。

「うあ……」

魅恵は堪らず、情けない声を漏らしてしまう。女は楽しそうに、指を前後に動かし始めた。

「きついけど……もう経験済みみたいね。初めてかもって思ってたから、ちよつと残念」

指を前後に動かしながら、女は囁いた。晶よりも、少し乱暴な愛撫だが、女は的確に魅恵の弱い部分を責めてくる。

(どうしよう？ 変な気分になっちゃう……)

魅恵は、見知らぬ他人……しかも痴女に、胸や股間を弄ばれ、性的に昂ってしまったっている自分に、戸惑っていた。見知らぬ他人に、性的な行為をされる事への嫌悪感や不安感と、性的な快感への期待

感が、拮抗しているのだ。

（このまま抵抗しなければ、いかせて貰えるのかも……。家に帰っても、晶はいないから、して貰えないし……。晶は、浮気とか気にしないんだよな……）

様々な考えが、浮かんで消えて行く。理性的な思考を、性的な快感への欲望と渴望が、突き崩そうとする。

そんな風に、魅恵の拒否の姿勢が弛んだ事を、感じ取ったのだろう。女は、意外な行動に出た。

突如、女は痴女行為を止めたのだ。下着の中から手を抜いた女は、魅恵のショートパンツのファスナーを上げ、丁寧にボタンまで止めてしまう。

「――？」

いきなり痴女行為が止んだ事に、魅恵は戸惑う。だが、魅恵は女の意図を、すぐに理解する。

（あの時と同じだ……）

魅恵は、晶との最初の性行為を思い出した。半ば無理矢理愛撫し始め、性的に昂らせた所で愛撫を止めて、魅恵に性行為の合意を取り付けようとした晶の事を、魅恵は思い浮かべたのである。

女も晶と同じ事を、しようとしているに違い無いと、魅恵は勘付いたのだ。無論、晶ならともかく、見知らぬ他人……。しかも、痴女行為を働く様な女とセックスをする気は、魅恵には無かった。

魅恵は、後ろを振り返る。自分に靡いて来ると確信しているのだろう、自信有り気な笑みを浮かべている女の顔が、魅恵の目に映る。「続き、して欲しい？」

「――パス！ ブラ、返せ！」

女のジャケットのポケットに、魅恵は手を突っ込んで、自分のブラを取り戻した。そのまま、ブラを自分のポケットに突っ込んだ後、魅恵は女を無視する様に、窓の外の景色を眺め始める。

誘いを拒絶された上に、魅恵が自分を無視し始めた事は、女のプライドを、酷く傷つけた。女は苛々した様に、魅恵を睨み付ける。

苛立つ女を無視して、魅恵は平然と外を眺め続けた。程なく、電車は破魔崎駅に到着したので、魅恵は素早く電車を降り、女の方を振り返りもせず、逃げる様にホームを走り去って行った。

「女性専用車両にまで、痴漢……。じゃなくなつて痴女がいるとは思わ

なかつたよ。油断出来ないな……全く」

破魔崎駅から出た魅恵は、呆れた様に呟いた。

「ま、気にしてても仕方無いか。さっさと、夕食の買い物済ませて、帰ろうっと」

駅近くのスーパーに向かって、魅恵は歩き出す。途中、通り過ぎるサラリーマンや学生の目線が、自分の胸に集まるのを感じて、魅恵は自分が、ノーブラである事を思い出す。

「ショートパンツに黒のキャミソールで、おまけにノーブラか……。殆ど露出狂だな、俺」

魅恵は、スーパーの女子トイレで、ブラを着ける事にした。

スーパーのトイレは、階段を上がった踊り場にあった。魅恵は、少し緊張しながら、女子トイレの中に入る。女の身体になつてからは、外出中、基本的に女子トイレを使い続けているのだが、未だに女子トイレを使う事に慣れず、少し緊張してしまうのだ。

有り難い事に、トイレは無人だった。魅恵は洗面台の鏡の前で、キャミソールを捲り上げ、ブラを着け始める。

ホックが後ろにあるタイプなので、魅恵は少し手間取る。普段は着るだけでいいスポーツタイプのブラなので、背中のホックで留めるタイプのブラに、魅恵は慣れていないのだ。

不慣れなブラの装着に戸惑っている魅恵の目が、鏡に映った女の姿を捉えた。女は、魅恵には見覚えのある顔だった。

先程、電車の中で、魅恵に痴女行為を働いた、女だったのだ。女は魅恵の後を、つけていたのである。

ブラを装着する為、後ろに回っている魅恵の両腕を、女は掴んだ。魅恵はもがくが、身動きが取れない。

「何すんだよ、この変質者！」

「——全く、人の誘いを断るわ、変質者呼ばわりするわ、顔とは違って、可愛気が無い子ね……」

女は強い力で、魅恵を個室の中に、引きずり込む。

「誰か！ 人を呼ん……痛っ！」

「騒ぐと、折るよ。あたし柔術習ってるから、君の腕を折る事位、簡単なのよね」

魅恵は女に、腕を捻り上げられる。激しい痛みで、魅恵は声を出す気力を、失ってしまふ。

その隙に、女は自分のベルトを引き抜いて、魅恵を後ろ手に縛り上げる。

「念の為、口も塞いでおこうかしら」

着ける途中だった魅恵のブラを手に取り、女は魅恵の口に噛ませる。女はブラを、猿ぐつわの代わりにしたのだ。

あつという間に、魅恵は身体の自由を奪われ、声も出せなくなる。「さーて、君みたいな生意気な子には、どんなお仕置きをしようかな……」

勝ち誇った様な目で、女は魅恵を見る。女の視線が、魅恵の胸で止まる。キャミソールが捲り上がっているので、形が良く、程良い大きさの魅恵の乳房は、ほぼ露出していた。

「取り敢えず、胸からね」

女は魅恵の両胸に掌を被せ、揉み始めた。パンの生地を捏ね回すパン職人の様に、荒っぽく大胆に。

(続く)

※ 体験版は、ここまでです。続きは製品版の「少年少女ミケ」を御購入の上、お楽しみ下さい。

※ この体験版は、「少年少女ミケ」製品版に収録されている長編小説、「処女の銀輪」の冒頭部分を収録したものです。ちなみに、「処女の銀輪」は全体で五百七十枚程、体験版は冒頭百五十枚程を収録しています（枚数は、いずれも四百字詰め原稿用紙換算）。

※ 製品版には、他に「処女の銀輪」の番外編である短編が四本、収録されています（四本合計の枚数は、四百字詰め原稿用紙換算、二百三十枚程度）。